

千葉敬愛短期大学総合子ども学研究所

年 報

2020（令和2）年度

千葉敬愛短期大学

はじめに

鈴木 健一

千葉敬愛短期大学は、昭和25年に開学いたしました。昭和62年からはこの佐倉市に移り、地域の皆様の御理解・御支援を賜り、教育・保育の敬愛として、数多くの教育者・保育者を送り出してきました。お陰様で、本年度で創立70年を迎えることができました。この間、平成26年には佐倉市と連携協力に関する包括協定を締結し、地域と共に歩む大学としてさまざまな取り組みを行ってきております。

総合子ども学研究所は、平成21年に開設されました。本研究所は、

「子ども」を様々な視点から、学問的・実践的見地に基づいて研究し、本学の教育の充実発展を図ると共に、地域の教育・保育に寄与することを目的とする

としており、地域連携、共同研究の推進を事業目的に掲げ、さまざまな取り組みをしてきております。

今年度は、新型コロナ感染拡大の影響を受け、本研究所が主催したり協力したりする多くの活動が中止となりました。今後は状況を見極めながら、地域の皆様の御要望に応えるべく模索してまいります。

今年度の活動を、年報という形でまとめ、御報告いたします。併せて論文も掲載しております。御助言を頂戴できれば、ありがたく存じます。

本研究所の活動を進めるに当たっては、内外の方々から多大な御支援・御協力をいただきました。この場をお借りして、改めて深く感謝申し上げます。

千葉敬愛短期大学総合子ども学研究所 年報

目 次

はじめに.....	1
I 事業報告	
高大接続教育の推進・拡充・発展 令和2年度	5
II 研究論文	
保育士養成校におけるソルフェージュ教育の必要性 音楽表現とリトミックからの実践	岡崎 裕美・二見 美千代・佐久間 敦子 11
エピソード記述をもとにした園内研修の試み 保育者を対象とした研修の質的調査	齋藤 めぐみ 31
音楽表現・身体表現・造形表現を融合した「音楽影絵シアター」の3様式 保育者養成校の授業開発の記録	岡崎 裕美 41
子どもが生き生きと遊べる環境構成の一考察 幼稚園の事例を通して	小熊 真弓 53

I 事業報告

高大接続教育の推進・拡充・発展 令和2年度

〈教員基礎コース・保育コース設置校との連携〉

高校に専門の学びを設けている高校への出前講座や、本学での特別講座を設定しており、高校別の特別講座の依頼も増えている。「総合的な学習の時間のゼミ開設への講師派遣と継続支援」や文部科学省SPH事業の指定を受けた館山総合高校、保育コースが設置される四街道北高校に対する出前講座や特別講座は感染防止策を十分とりながら実施された。

今年度実施の出前講座

安房高校教員基礎コース特別講座（齋藤）・館山総合高校SPH特別講座（村瀬）

四街道北高校特別講座（岡崎・二見）・体験講座「リトミック・音楽表現」（二見・岡崎）

我孫子高校教員基礎コース夏期講座（学長）・浦安高校探求ゼミ（久保木）

東金商業高校（吉村）・四街道高校（大野）・佐原白楊高校（佐久間）・横芝敬愛高校（村瀬）

体験講座「手袋人形で遊ぼう（制作・表現あそび）」（大野）

体験講座「ミュージックベルを奏でよう」（岡崎・二見）



四街道北高校特別講座「リトミック」



浦安高校 高探求ゼミ「絵本制作」



体験講座「ミュージックベル」





体験講座「手袋人形で遊ぼう」



館山総合高校SPH特別講座「身近なもので運動あそび」



横芝敬愛高校「運動あそび」

〈インターンシップ・プレ講座〉

高校では、希望者が何かしらのインターンシップを体験するプログラムがあるが、その中に、保育園・幼稚園体験と小・中学校体験がある。これらのインターンシップに参加する高校生に向けた事前学習のうち、専門的な領域で本学が講座を提供するもので、依頼を受けた高校に対し実施している。（今年度は中止）

〈一日体験授業・高校生セミナー〉

専門的内容の授業、教育・保育に関する学びを体感するプログラムを構成し、昼は学生食堂を体験させ、学生の一日を体験できるように設定し、高校生が参加しやすい千葉県民の日に実施している。（今年度は中止）

〈2.5教育－入学前教育〉

千葉敬愛短期大学は、以前からピアノの未経験者に対する入学前教育を実施していたが、平成28年度より、入学予定者への2.5教育（入学前教育）がスタートした。初年度は、従来の「ピアノの初心者向け講座」の回数を増やし、かつ、教育・保育の現場で必須の「書くこと・話すこと＝日本語」についての講座、さらに保育コースには「絵本ノート」「音楽表現」、初等教育コースには「教員採用試験－基礎教養」の講座を設定し、2日間実施した。令和元年からは、保育者・教育者としての資質の育成を狙いとした講座を組み込み、入学後の授業と関連した講座を充実させてきた。今年度（令和2年度）は、コロナ禍の中ではあるが、感染防止策をとりながら、下記の講座を12月20日と2月13日に実施した。日本語については別の講座も予定されていたが、入学後の正規授業の中で実施される。

今年度実施の入学前講座

学長挨拶

明石

1 「入学前教育について」・「絵本について」

吉村

- | | |
|--------------------|-------|
| 2 「本学の理念・敬天愛人について」 | 新田 |
| 3 「保育者としての心構え」 | 伊藤 |
| 4 「保育者とは」 | 押尾 |
| 「保育者のための日本語基礎講座」 | 佐久間 |
| 5 「保育者のための音楽基礎講座」 | 岡崎・二見 |
| 6 「初心者のためのピアノ講座」 | 竹内・兵頭 |



「入学前教育について」・「絵本について」 吉村教授



「保育者としての心構え」 伊藤准教授



「保育者のための音楽基礎講座」 二見講師



「初心者のためのピアノ講座」 竹内特任教授

〈高大連携協定締結校〉

(平成28年度) 我孫子高校・君津高校

(平成29年度) 土気高校・成田北高校、SPH協力館山総合高校

(平成30年度) 四街道北高校・松尾高校・小見川高校・浦安高校

(令和2年度) 若松高校・佐倉西高校・佐倉南高校

本学の教育・学生・教職員の活動等の情報はホームページで発信しております。
(ライン・インスタグラム・ツイッター QRコードをご利用ください。)



(文責：佐久間敦子)

Ⅱ 研究論文

保育士養成校におけるソルフェージュ教育の必要性

音楽表現とリトミックからの実践

岡崎 裕美・二見 美千代・佐久間 敦子

Necessity of the Solfege Education in a Training School for Nursery-school Teachers
Practice by Music Representation and Rhythmic

Hiromi OKAZAKI / Michiyo FUTAMI / Atsuko SAKUMA

キーワード：保育士、音楽の基礎、読譜力、リズム遊び、音楽の楽しみ方

I はじめに

初心者へのピアノ実技指導については、多くの保育士・幼稚園教諭養成施設において同様の課題がある。一つは、入学者の多くがピアノの未経験者であり、音楽の基礎知識が乏しいという点での指導の難しさである。二つ目は、「保育者としての音楽実技能力とは何かということであり、音楽指導を行うにあたって必要な素養とは何か、その素養を育むための手段は現状で良いのか、その指導内容が時代のニーズと合っているのかを常に問い省み、授業内容を改善していくこと」（上野亜希子他 福山市立大学教育学部研究紀要）である。

一つ目の課題については、本学においても、入学前のアンケートによれば、毎年40%から50%の学生がピアノ未経験者である。また、経験の有無にかかわらず、音符や音楽用語の理解などの基礎知識の習得についてもばらつきがあり、経験のレベルも大きく異なり、指導にかなりの負担がかかっている。

また、本学のピアノの実技指導においては、レベル別（習熟度別）のグループ編成をしていないため、指導者の個人的な創意工夫や努力に委ねられている。習熟度別グループにしないのは、グループ内の教え合いや刺激の効果を狙っているからである。このことで成長する学生も多いが、一方でまったくの初心者においては「できない自分」を感じ、努力する前に諦めるなど、授業に対する意欲をなくす学生も出ている。担当教員の熱心な指導・助言があっても、授業自体が苦手になるのでは、教員の苦労が無駄になることであり、学生にとっても不幸なことである。

本研究は、本学の学生の実態を調査し、入学前教育の中で少しでも基本のレベルに近づけ、ピアノの実技の指導にかかる負担の軽減につながる方法を考え、かつ入学後の授業への意欲・関心を維持できるような入門期の指導やその後の授業の内容や方法、採用試験の対応までを総合的に支援する教育の在り方を探るものである。

以下の論については、本学の入学前教育のアンケート、保育士・幼稚園教諭採用試験、養成校における音楽実技の具体例の報告を佐久間が、高校生セミナー・模擬授業・入学前教育における音楽講座の実践研究からの提案を岡崎・二見が担当し、まとめた。

Ⅱ 入学前教育時のアンケート・ピアノ初心者講座、採用試験、及び養成校の音楽実技の指導事例について

1. 入学前教育時のアンケートについて

本学においては、入学予定者のうち、希望者にピアノ初心者講座を実施してきた。入学前教育を明確に位置付けた平成28年度以降の受講者数は30名程度（枠を設けたため）から徐々に増加し、2021年度入学生では約半数が希望した。また、今年度の入学前教育時には、音楽の基礎知識の理解についてアンケートを実施した。結果は以下のとおりである。

対象者：入学前教育（2020.12.20実施の参加者49名）

表1 ピアノの指導を受けたことの有無・習得レベルの調査

経験の有無	経験なし 23名 47%	経験あり 26名 53%					
レベル		バイエル等の教本の利用					バイエルを用いず
		バイエル途中 6名	ブルグミュラー 1名	ソナチネ 2名	ソナタ 0名	ソナタ以上 1名	
経験年数		1～3年 3名 16年 1名 無記入 1名	7年 1名	8年 1名 10年 1名	—	15年 1名	1～5年 5名 6～8年 6名 12年 1名 無記入 2名

*ピアノの指導を受けた経験の無い者は全体の47%、経験者のうちバイエルの途中までと回答をした者は6名であり、演奏技術の習得について、半数は未修得と想定される。

表2 音楽的基礎知識の理解についての調査（数字は人数）

音楽的基礎知識	未経験者 23	バイエル途中 6	ブルグミュラー 1	ソナチネ 2	ソナタ 0	ソナタ以上 1	バイエル不使用 16
ト音記号の音符 読める 17	4	2	1	—	—	1	9
数えながら 25	14	4	1	—	—	—	6
ヘ音記号の音符 読める 8	1	1	1	—	—	1	4
数えながら 31	15	4	—	1	—	—	11
楽譜の記号の意味 理解 23	4	5	1	1	—	1	11
音符や休符の理解 22	3	4	1	2	—	1	11

*入学前教育で基礎的な内容を学習した後の回答のため、「わかる」の回答が増えている可能性が高い

*経験者であっても、基礎的な知識の理解が乏しい状況が予測される。音楽の基礎知識に関しても入門期に個々のレベルの確認が重要で、グループ編成や学習内容の構成、指導法に反映させることが重要である。

*この調査は、2月13日の学校推薦型等の入試による入学者に対する講座でも実施し、傾向を再度確認する。

2. 保育士・幼稚園教諭採用試験における音楽理論・音楽実技について

採用試験対策本のいくつかを散見すると、実技試験については、おおむね以下のとおりになる。

（1）実技試験

① 課題曲演奏

（世界中のこどもたちが、思い出のアルバム、どんぐりころころ、不思議なポケット、犬のおまわりさん、山の音楽家、あわてんぼうのサンタクロース、季節の歌等）

② 弾き歌い

③ 自由曲演奏

④ 初見演奏・視唱

⑤ 歌唱

⑥ コールユーブンゲン

⑦ 手遊び歌実演

*初見を課す幼稚園が増えており、豊かな表現や読譜力・初見力のある学生を求めるところが多くある。(うまく弾くこと以上に、楽譜を見て弾く力の育成が重要。)

*弾き歌いは、日常の保育の中で求められる力であり、弾き歌いを主とする試験を課す所も増えている。(歌唱と伴奏のバランスが取れているか、大きな声で歌うのではなく、正しい発声法で歌うことができているかを試されるため、歌唱法についての学習も必要である。)

(2) 音楽理論

① 音楽用語・階名・調

強弱を表す記号、速さを表す記号、発想やその他の記号、音階と音名、階名、調号

② 音程・移調

③ コードネーム

*音楽用語の読み方や意味を選択または記入する問題が出題されており、音楽の基礎知識の理解力が問われる問題は毎年出題される。基礎理解があって初めて楽譜を見て弾くということが可能であり、覚えて弾くのではなく、楽譜を読む力の育成が重要である。

■引用文献

・「保育士及び幼稚園・小学校教員養成課程における音楽実技能力育成の現状と課題」 上野亜希子・神古麻弥・佐分利小夜子・高橋元子・永井益子・古山典子 福山市立大学教育学部研究紀要 vol 7 2019

■参考文献

- ・「教員・保育士養成課程における初心者へのピアノ実技指導の一考察」 穴澤彩佳・松田由理子・寺田有希 國學院大學北海道短期大学紀要第35巻
- ・「幼稚園・保育所・小学校の採用試験における音楽に関する出題傾向」 衣川久美子・山崎和子・由井敦子 甲南女子大学研究紀要第52号 人間科学編 (2016年3月)
- ・令和2年度岡山市職員(保育幼児教育)採用選考試験受験案内 岡山市人事委員会・岡山市教育委員会
- ・保育士就活バンク https://hoikushi-shusyoku.com/column/posuto_846/
- ・studio ドルチェ ピアノ教室 <https://pianodolce.jp>
- ・保育士・幼稚園教諭採用試験問題集2021年版 実務教育出版
- ・保育士実技試験 2020年版 成美堂出版
- ・スイスイわかる幼稚園・こども園教員採用実技試験 一ツ橋書店 他

Ⅲ 養成校の実践例(下線部は引用)

國學院大學北海道短期大学研究紀要 第35巻

「教員・保育士養成課程における初心者へのピアノ実技指導の一考察」 穴澤彩佳 他

入学者のピアノ演奏レベルは様々であり、まったくの初心者かそれに近い学生が多いと言わざるを得ない状況が続いている。教育や保育の現場から求められているピアノの演奏レベルに到達させることはかなり難しい。」状況から、「ピアノ実技Ⅰ・Ⅱ」「保育表現技術(音楽)」の教育実践では、前期1回目の授業でピアノ指導を受けたかの有無と理解度レベルの調査をし、学生をグループ分けし、自分のレベルに応じた環境で指導を受けるようにした。それによるレベルの区別は以下のとおりである。

初級：指導を受けたことがなく、音符が分からないあるいは少しわかるがピアノは弾けない。

中級：音符は少しわかる、ピアノは右手で弾ける、あるいは両手で弾ける。

上級：音符が分かりピアノを両手で弾け、ピアノの指導を受けたことがある。

回答の率を見ると、年々初級の率が上がっており半数以上が未経験者である点は、本学も同様である。

実際のグループ分けには、実際に弾かせることや、簡単な基礎理論のチェックテストの実施も必要だと考えるが、「同レベルの学生がグループ化され、授業の効率化が見込まれる」としている。

福山市立大学教育学部研究紀要 第7巻 2019

「保育士及び幼稚園・小学校教員養成課程における音楽実技能力養成の現用と課題」上野亜希子 他
において、2018年9月に実施した、いくつかの大学のシラバスの調査によれば、授業の内容については以下のとおりであった。

① 弾き歌いを主に行うもの	11校
② 教則本を使用してピアノ実技に特化しているもの	1校
③ 弾き歌いとピアノ実技を同程度に行うもの	14校
④ 楽典及び音楽実技全般を扱う中に弾き歌い・ピアノ実技を組み込んでいるもの	2校

また弾き歌いの授業においてはコードネーム伴奏を丁寧に指導している大学が多くみられたとした。

コードの学習に重点を置くということは、その曲の持つ調性感を育成するという意味があるが、その一方には、初心者には市販されている伴奏譜では演奏が困難であるという背景がうかがえる。とし、主要三和音によるコードを中心とし、それに特殊な和音の学習を行い自分で伴奏を編曲できる能力の育成を目指す大学の授業計画を示している。

楽典とソルフェージュに半数の時間を費やし、楽譜を読む、演奏するための基礎知識と技術を丁寧に指導しその後子どもの歌の歌唱と伴奏を、基礎と応用に分けて徹底して指導する大学の事例も紹介している。

採用試験や現場に出てからも、自力で学び続けていくためには、このような養成課程での授業計画が重要であり、コードネームによる伴奏法などと共に、効果的に組み合わせていくことが重要ではないかと考える。

初心者が、何とか工夫して子どもたちと季節の歌や手遊び歌を楽しむことができるよう現場で活用できる音楽技術の習得を可能にし、また担当教員の工夫や苦勞が報われる教育、学生にとって、学びが実感できる教育の為に、できることを一歩ずつ実践していくことを提案したい。

テキストについては、採用試験では、音楽理論、歌唱、初見演奏を求められることが多く、課題として園の生活に関係した挨拶の歌や季節の歌、行事の歌などが課せられることなどから、『こどものうた200』（チャイルド社）や、『こどものうた140選』（ドレミ楽譜出版社）、『心を育む子どものうた』（教育芸術社）等が弾き歌いのテキストとして採択されている。

ピアノの実技レッスンでは『バイエルピアノ教則本』を使用する大学が7校（37校中）であったが、学生各自のレベルに応じて担当教員が適した楽曲を与えるという大学も多かったという結果であった。前述の大学のように、ソルフェージュを前半で徹底して指導する方法も検討する価値があると考ええる。

（佐久間）

Ⅳ 研究の背景

保育士養成課程において、音楽は重要な位置づけとなっている。幼稚園教育指導要領において音楽については、表現の内容(6)に「音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。」¹⁾と記されている。保育士養成校である本学においても、保育士として持つべき音楽能力を様々な視点から捉え、より効果的な教育方法を模索したい。

保育の現場では、生活の歌、季節の歌、行事の歌、園歌など多くの楽曲をピアノで演奏する場面がある。学生は、在学中より多くの楽曲を演習することが求められるが、2年間という短い期間に習得できる数には限りがある。卒業後、就労しながら新たな楽曲を習得することも考えられるため、在学中に楽

譜を読む力すなわち読譜力（ソルフェージュ）を身につけることが重要である。読譜力（ソルフェージュ）がある場合と無い場合では、保育士として鍵盤楽器を演奏する場合の演奏可能な楽曲数に大きな差が出るといっても過言ではない。

鍵盤楽器の演奏においては、音を読む、リズムを打つ、運指を正確に把握する、鍵盤の位置を正確に把握する、フレージング、強弱など多くの知識と技術が必要とされる。また、弾き歌いについては、これらの技術に加え、弾いている手元ではなく子どもに向かって歌いかねなければならない。このため、本来多くの練習時間が必要とされるが、練習方法を効率化することにより、限りある時間の中でより多くの楽曲を習得することができるのではないだろうか。そのために、読譜力（ソルフェージュ）を強化することが初めの一步と考える。

V 研究の目的

保育コースに特化する本学の「保育者を目指す幼児の音楽」の学びにおいて、「読譜力（ソルフェージュ）」を学習することは必要不可欠である。特に鍵盤楽器演奏未経験者においては、基礎的な「読譜力（ソルフェージュ）」と「音楽理論と知識（楽典）」を学ぶことがより重要である。また一方で、鍵盤楽器演奏経験者においても、保育に関わる一定の「読譜力（ソルフェージュ）」と「音楽理論と知識（楽典）」を習得することは必要である。本研究では、この二つの取り組みを継続することによって、学生全体における音楽的能力のスキルアップを図り、長期的には、保育士に必要な音楽基礎実技と音楽基礎知識における基盤を作り、ピアノ実技習得の礎を築くことを目的とする。また一方で、ミュージックベルやボディパーカッションなど様々な音楽の楽しみ方を学ぶことにより、学生自身が音楽に親しみをもち、保育士として幅広い音楽表現を習得することも目的とする。

VI 実践研究 令和2年度に実施した取り組み

1. オープンキャンパス『リトミックで遊んでみよう』：8月2日(日)

1) 模擬授業 リトミック「王子様と一緒にお城に行きましょう！」

1)－1 音符を身体表現する

音符を身体表現することの主な目的は、「音符」の音価を習得することである。これは、音楽を学習するために必須である「音符」を、理論からではなく体感的に音符の長さを習得する方法であり、言語理解が発達途中である幼児にとって容易に「音符」の音価を習得することが期待できる。

本実践では、指導者が演奏する2分音符、4分音符、8分音符、付点のリズムの四つの音楽を聴き、各音符の長さを身体表現する取り組みを行った。

方法は、まず全員で「くま」、「兵隊」、「小鳥」、「王子様が乗っている馬」のイメージで動く取り組みを行った。「くま」はゆっくり足踏み、「兵隊」は普通の速さで軽快に足踏み、「小鳥」は速い速さで細かく足踏み、「王子様が乗っている馬」はその場でスキップをするという動きとした。

次に3つのグループに分かれ、各グループに「くま」、「兵隊」、「小鳥」から1つずつ担当を決め、自分の担当の音楽が聞こえた時のみ動く取り組みを行った。また、「王子様が乗っている馬」の音楽は全員で動くこととした。

なお、本実践で使った音楽は、「くま」は2分音符、「兵隊」は4分音符、「小鳥」は8分音符のみで構成されているものとし、また、「王子様が乗っている馬」は付点8分音符と16分音符で構成されたリズムのみで構成されているものとした。

上記のように、イメージで動く取り組みをした後、各音楽と音符（付点のリズム含む）を一致させる取り組みとして、各イメージの音楽が何の音符で構成されているのか説明をし、動きと音符の関係性につ

いて指導を行った。

1) - 2 拍に合わせる

音楽の根底には「拍（ビート）」が流れている。この拍に合わせて身体を動かすことは、音楽の基本的な流れを掴むための手がかりとなる。音楽を意識的に聴き、それに合わせて動くことにより基本的なビート感を養い、また音の有無によって即時に動きを変えることにより、集中力を養うことが目的である。

本実践では、指導者のピアノ演奏に合わせて学生が手拍子や足踏みをし、音楽が止まったら動きを止め、また音楽が聞こえたら動き始めるという取り組みを行った。

1) - 3 音の高低に合わせる

幼児において、音の高低を聴き分ける時に「高い音」「低い音」という認識を持つことは少ない。「高い音」は、「キラキラしている」や「小さい音」という言葉で表現し、「低い音」は、「怖い音」や「大きい音」という認識を持つ場合がある。このため、幼児に指導する場合は、身体の「高い位置・低い位置」と「高い音・低い音」を繋げることにより、音の高低という認識ができるようにすることが必要である。

本実践では、この目的の説明とともに、実際に指導者の演奏する音楽に合わせて、高い音が聞こえた時は頭上で手を叩き、低い音が聞こえた時は膝を触るという取り組みを行った。

1) - 4 休符を身体表現する

本実践では、休符に注視し、意識的に休符を体験することを目的としている。音がある部分と音のない部分を瞬時に聴き分けるという内容で、楽曲「ロンドン橋」（イギリス民謡）を使用し、歌の部分は簡単な振り付けを繰り返し、休符の部分は両手をパッと広げるという取り組みを行った（参考①）。馴染みのある楽曲を使用することにより、幼児（本実践では学生）が楽しみながらその目的を達成することが期待できる。

また、歌詞の「さあ、どうしましょう」の部分では、「素敵なお姫様」のポーズを各自考えて即興的に動くという取り組みを行った。これは、「素敵なお姫様」という言葉から想像力を働かせ、瞬時にポーズをするため、想像性、瞬発力を養うことが期待できる。

参考①：「ロンドン橋」（イギリス民謡）と動き（●は、休符）

歌詞→	「ロンドン橋落ちる	●	落ちる	●	落ちる	●
動き→	トントン・・・	パッ	トントントン	パッ	トントントン	パッ
歌詞→	ロンドン橋落ちる	●	さあ、どうしましょう」			
動き→	トントン・・・	パッ	素敵なお姫様のポーズ			

1) - 5 結果と考察

音符を身体表現する取り組みでは、学生がグループに分かれて担当の音楽を動くことは比較的スムーズにできた。これは、初めに全員で4つの音楽の動きを幾度か繰り返し行ったため、学生は聞こえる音楽とイメージを一致させることができたと考えられる。

また、各音楽と音符（付点のリズム含む）を一致させる取り組みを行った時は、若干戸惑う学生もみられたが、ほとんどの学生は正しく動くことができた。

拍に合わせる取り組みと音の高低に合わせる取り組みにおいては、どちらも学生は比較的早く指示した動きができた。これは、学生が集中して音を聴き、意欲的に取り組めたためと考えられる。

また、休符を体験する取り組みでは、指導者の振り付けを模倣する部分は、ほとんどの学生が問題なくできた。「素敵なお姫様のポーズ」を行う取り組みでは、学生は周りの様子をうかがいながらではあったが、それぞれ思い思いのポーズを取ることができた。

2. 高校生セミナー：8月5日(水)

模擬授業『保育の音楽』（50分）四街道北高校1年生16名対象

1) 模擬授業の内容と目的

子どもの音楽的表現力をより豊かに育むためには、まずは保育者自身が自らの感性を磨き、豊かな表現力を身につけることが大切である。本実践では、保育士養成課程の音楽の基礎知識を解説し、身体表現を通して体験した。

保育士を目指すピアノ初心者にとっては、楽譜の理解（読譜）が必要であると考え。まず、音楽の基礎のひとつである「拍子の理解」から4分の4拍子を例にとり、拍子について説明を行った。拍子の理解においては、幼少期にピアノを習ったことがある生徒や吹奏楽などの部活動で演奏の基礎を学んだことがある生徒と、全くそれらの経験のない生徒では理解度に温度差があるが、音楽の基礎を改めて確認しておくことは重要である。音符やリズム、調などの基礎知識を習得することで、ピアノ実技や弾き歌いのスキルアップに大きく役立つ。

この模擬授業では「拍子とリズム」に焦点を当て、50分という短時間の中で楽しく学ぶ内容を指導した。

2) 模擬授業(1) リズムダンス「まねっこリズム」(作詞・作曲：高附恵子)

拍子についての理解

2) - 1 拍子についての理解

「まねっこリズム」は、リーダーの創作したリズムを模倣するリズムダンスの楽曲である。身体表現に入る前に、五線譜に書かれた拍子をどのようにカウントするかを理解するために拍子の説明をした。4分音符（J）1拍をリング1個と設定する。4分の4拍子とは、1小節の中に4分音符が4つ分入る拍子であるから、1小節にリングが4個分入る拍子である。ということは、4分の3拍子の場合は1小節にリングが3個分、4分の2拍子の場合はリングが2個分入った拍子であることを理解することができる。

2) - 2 リズムについての理解

拍子の基本を理解した上で演習に入る。本実践では、4分の4拍子の「まねっこリズム」という幼児のリズム遊びの曲を使用して取り組んだ。1小節間にリング4個分、つまり「J J J J」の音符をアレンジする。8分音符（♪）は、4分音符の半分の単位、つまりリング半個と考え、数字で表すとリングが0.5個と理解する。

このように、音符や休符をリングの単位や数字に置き換えることで、五線譜に書かれたそれぞれの拍子を理解することができる。

2) - 3 リズムの創作

遊びの演習前に曲を聴いてみることで、リズム遊びの全体像を把握し、イメージを膨らませることができる。

本実践では、4分音符と8分音符、4分休符を使って、4分の4拍子1小節間のリズムを創作する。

まず、まねっこのリズムの部分（パンパンパン）を筆者自身が4分音符3つ（パンパンパン）と4分休符1つ（ハイ！＝相手にリズムを真似するように促す言葉）で例を示し、生徒がそのリズムの真似をする。この時に大切なことは、リズムを言葉に置き換えて相手（幼児）に伝え、その言葉で相手（幼児）が真似をすることである。言葉で伝えることによって、幼児は「音」と「言葉」でリズムを体感することができる。

次に、8分音符を交えたリズム（パンパパン）と4分休符1つ（ハイ！）を叩いてみる。このように音符を組み合わせることで、1小節の単位を体感することができる。

また、リズムを歌の歌詞にして創作することは、生徒（学生）にとっても幼児にとっても、リズムの

組み合わせが理解しやすい。

2) - 4 リズムダンスの通し練習

歌い出しの5小節間は、リズムダンスの振り付けを行い、全員で練習した。創作リズムの箇所からは、Aさんの創作リズム（1小節間）→全員が模倣する。続いてBさんの創作リズム（1小節間）→全員が模倣する。同様にCさんの創作リズム（1小節間）→全員が模倣する。最後の「じょうずにできました！」の箇所は、全員が右手で大きなハナマルを描く。これを1コーラスとして、リズムの創作メンバーを交替して2コーラス続けて行った。

2) - 5 結果と考察

「まねっこリズム」は、シンプルな楽曲ではあるが、生徒にとっては初めて聴く曲であり、リズムの創作の作業もあってハードルも高かったかもしれない。しかし、このような模擬授業では、間違えることも含めて楽しむ気持ちや、みんなで励まし合ったり応援し合う気持ちを共有することが大切であると考ええる。失敗することを恐れず一歩踏み出してチャレンジすることで音楽表現の楽しさを実感し、仲間と協力して取り組むことで達成感にも繋がるからである。

時間に余裕があればグループに分かれてしっかり練習し、心地よい緊張感の中で成果発表に臨むことができたに違いない。次のステップに挑戦する機会があれば、今回の経験を生かして多様なリズムのバリエーションを楽しんでもらいたい。

3) 模擬授業(2) ボディパーカッション「心合わせて手拍子タタ・タン」

ボディパーカッションは、歌が苦手でも楽器の演奏ができなくても音楽として簡単に演奏を楽しむことができ、誰でも参加することができる。

今回の演習では、4分音符と8分音符と4分休符で作曲され、手拍子のみの3つのリズムパートで構成している「心合わせて手拍子タタ・タン」（作：山田俊之）の楽曲を使用した。

3) - 1 リズム打ちの練習手順

生徒をA、B、Cの3パートに分けてリズム打ちの練習をする。練習の手順は次の通りである。

- ① 全員でAパートのリズムを練習する。
- ② 全員でBパートのリズムを練習する。
- ③ 全員でCパートのリズムを練習する。
- ④ Aパート、Bパート、Cパートの3人1組を作って練習する。
- ⑤ 全体を大きくAパート、Bパート、Cに分けて練習する。
- ⑥ 全体を3つのグループに分け、成果発表をする。

3) - 2 リズム打ちの練習のねらい

まず、全体の楽曲の構成を把握するために、リズム譜の読み方を説明した。それぞれのパートのモチーフと全員がユニゾンで演奏する箇所を確認した。

次に、自分が担当するパートのモチーフだけでなく、他のパートが同時にどのようなリズムを打っているかを理解しておくために、3) - 1 ①②③の練習をする。この練習は、それぞれのパートがスタートするまでの小節数の確認をすることができる。

3) - 1 ④は、自分のパートと他のパートとのタイミングを感じながら、より正確に拍子の縦線を揃える練習である。

3) - 1 ⑤では、各パートが多人数になるため、④の練習より集中力が求められる。

最終段階の3) - 1 ⑥では、自分以外のグループの演習を見ることで、全体の楽曲を客観的に捉えることができ、自分への課題を見つけることができる。

3) - 3 結果と考察

ボディパーカッションの魅力は、作品を通して自分の意思を伝達すること、コミュニケーション力の開発や仲間意識・自己表現力の向上に役立つこと、また、見ている人を楽しませる活動に発展させることにある。

みんなで一つの楽曲を完成させるためには一人一人のリズム感の完成度が求められる。受講者のアンケートには「みんなの前で発表することは緊張したが、短い時間の中での成果発表の達成感を得ると同時に、拍子とリズムの関係を理解するができた」との感想があった。身体を使って音楽の要素を感じながら楽しく演習することが、音楽の基礎知識への学びの意欲に繋がることを期待したい。（岡崎）

4) 模擬授業(3) リトミック「いちご狩りに行こう！」

4) - 1 変化するテンポを身体表現する

音楽には様々なテンポが存在している。速いテンポ（Allegro、Prestoなど）の楽曲、緩やかなテンポ（Andante、Adagioなど）の楽曲、また曲の途中から次第にテンポが変化するもの（accelerando、ritardandoなど）があり、本実践の目的は、これらを身体表現することにより音楽のテンポ感を養うことである。

本実践では、「電車が走るイメージ」をしながら、遅いテンポ、次第に速くなるテンポ、速いテンポ、次第に遅くなるテンポを学生が体験する取り組みを行った。これは、電車が駅から出発し、次第に速度を上げ、速い速度で走行し、次第に速度を下げて次の駅に到着するという一連の流れを想像し、学生に実際に足踏みの速度を変えていくことを体験させることである。

本来のリトミック指導では、歩く、走るといった動作をすることでテンポ感を体験することが多いのだが、コロナ禍による状況を鑑み、学生が移動することなく速度感を感じる事ができるよう、足踏みの速度を変えることで代用した。

4) - 2 「ド」と他音の違いを聴き分ける

楽器の音を聴いて音名が分かるということは、保育の現場で音楽に携わるときに様々な場で役に立つと考えられる。その第一歩として、学生が「ド」の音を身につけ、相対音的に他の音名が分かるようにするための取り組みを行った。また、動作を伴うことにより、体験したことを脳に印象付け、しっかり覚えるという効果が期待できる。

本実践では、「いちご狩りに行こう！」という架空の題材を使用しているため、「いちご」を見つけた時の合図の音を「ド」とした。学生は、ピアノの音で「ドドドー」と聞こえたら、膝を叩きながら「ド」の音で「みーつけたー」と発声し、他音が聞こえたら手を振りながら「ちーがーうー」と発声することとした。

4) - 3 リズムを覚える

音楽には、様々なリズムが存在する。多くのリズムを経験することにより、楽曲演奏を容易にできることが期待できる。

本実践では、少し長いリズムを覚える取り組みの一例として、簡単な文章のリズムを使った身体表現を行った。先の取り組みの流れに沿って、「いちご、いちご、おいしいね、パク！」という文章に合わせ、「♪ ♪ | ♪ ♪ | ♪ ♪ | ♪ ●」（●は、4分休符）のリズムを使用した。このリズムを学生がしっかり覚えるために、①手で叩く、②身体の様々な部位を叩く、③周りに向かってグーでパンチをする、④足踏みをする、⑤身体の様々な関節を動かす、以上5つの取り組みを行った。①②③は、主に手を使った動き、④は、主に足を使った動き、⑤は、身体全体を使った動きである。このように、リズムの動きを様々な身体の動きを使用することによって、そのリズムをしっかり記憶することが期待できる。

4) - 4 楽曲における変化するテンポを体験する

本実践のまとめとして、楽曲「きらきら星」（フランス民謡）を使用し、学生が音楽のテンポに合わせて机を叩いて音を出すという取り組みを行った。初めは、速度表示 ♪ = 100 程度で演奏し、次第に速く

(accelerando)、次第に遅く (ritardando)、速く (Allegro など)、遅く (Adajo など) といった様々な速度で行った。

4) - 5 結果と考察

変化するテンポを体験する取り組みにおいて、その場で足踏みのテンポを変化させたケースでは、多少動きづらかった様子がみられた。これは学生がスリッパを履いていたため、足の動きが思うようにできなかったのではないかと考えられるが、音楽を聴いてテンポの変化を体験するという目的は達成できた。

「ド」と他音の違いを感じる取り組みでは、ほとんどの学生は、低音、高音ともに「ド」から遠い高さの音と「ド」の違いは聴き分けができた。しかし、「ド」に近い高さの音では、低音、高音ともに聴き分けが難しい学生もみられた。これは、楽器の音を集中して聴く経験が少ない学生にとっては、この取り組みの難度が上がってしまったと考えられるが、この点については今後精査をする必要がある。

リズムを覚える取り組みでは、比較的スムーズにリズムを覚えて表現できた。これは、リズムの音符「♪ ♪ | ♪ ♪ | ♪ ♪ | ♪ ●」(●は、4分休符)を見るだけではなく、「いちご、いちご、おいしいね、パク!」というリズムに合わせた文章を発声することで、容易に覚えることができ、さらに身体の様々な部分を動かすことで、このリズムがしっかりと定着できたためと考えられる。

楽曲における変化するテンポを体験する取り組みでは、馴染みのある楽曲を使用したため、戸惑うことなく行うことができた。様々に変化するテンポの演奏にも、ほとんどの学生が集中して聴き、音楽と同じテンポで机を叩くことができた。(二見)

5) 模擬授業(4) ミュージックベル演習

本実践では、楽器演奏の取り組みとして「ミュージックベル」の演奏体験を行った。「ミュージックベル」に初めて触れる学生が多くいる事を想定し、楽器の持ち方や振り方の指導と、楽曲「ドレミの歌」(R・ロジャース作曲、著者編曲)の演奏指導を行った。この楽曲は、①馴染みのある楽曲、②音階を多く使用しているという点でメロディーが分かりやすいため、演奏に専念できるという観点から選択した。

5) - 1 楽器の持ち方と奏法

楽器の持ち方は、実際に楽器の握り方を実践して見せ、学生に「ミュージックベル」を1本ずつ持たせ、利き手と非利き手で持つ練習を行った。

奏法は、「スプリング奏法」^①と「トレモロ奏法」^②の二種類の奏法を指導し、利き手と非利き手では音の出方が違うということを体験させた。それを踏まえ、学生は各自演奏をする時の持ち手を決めて演奏に備えた。

5) - 2 音の確認と楽譜の確認

実際に演奏をする前に、学生が自分で持っている「ミュージックベル」の音を確認し、楽譜に各自担当音に丸印を付ける作業を行った。これは、楽曲の流れの中で自分の担当部分を正確に把握するためである。一人で演奏する場合と違い、合奏の場合は全体の流れの中で、自分の担当音と担当箇所を正確に把握することは大変重要である。

さらに、本実践で使用した楽譜には繰り返し記号が書かれているため、記号の説明とともに演奏順序を指導した。

5) - 3 音名読みとリズム打ち

次に、CD音源を聴きながら、①メロディーを音名で読む、②メロディー全体のリズムを手で叩く、③各自担当音のリズムを手で叩く、という順序で、実際に音楽の流れの中で自分がどのように演奏すれば良いのかを、音楽を聴きながら確認をする取り組みを行った。

5) - 4 練習と発表

全体の流れが掴めたところで、実際にミュージックベルを使用して個人練習を行った後、全員での合同練習を行った。合同練習では、初めに4小節ずつ区切り、遅いテンポでメロディーの音名を発声しながら演奏し、次に初めから最後まで繋げて少し早いテンポで演奏した。本実践で使用した楽譜は、途中二声に分かれているため、学生をAチームBチームに分けて一声ずつ担当とした。両チームでの合同練習の最後に、CD音源に合わせて発表を行った。

5) - 5 結果と考察

多くの学生が楽器の持ち方や振り方についてその趣旨を理解し、積極的に練習に取り組んでいた。

楽曲「ドレミの歌」は、歌詞に音名が多用されていることや、音階がメロディーに使用されていることから、メロディーの音名を覚えることは比較的スムーズにできたとみられる。また、学生の席順にミュージックベルを低音から高音に順に配布したことで、音階のつながりを感じやすくなり、容易に演奏できたと考えられる。時間の関係上、練習時間はそれほど長くは取れなかったが、二声に分かれている部分も各自練習に取り組み、発表の場面でもハーモニーを感じながら演奏することができたとみられる。

(二見)

■注

- (1) スプリング奏法……1回振り。
- (2) トレモロ奏法……連続振り。

3. オープンキャンパス『リズムで遊ぼう』：8月23日(日)

1) テーマ「リズム」……高校生までに学んでおきたい「音楽の基礎(楽典)」

今回のオープンキャンパスでは、音楽表現・身体表現・リトミックの3つの分野でそれぞれ「リズム」をテーマに模擬授業を実施した。筆者の音楽表現の講座では、8月5日に実施した四街道北高校の模擬授業と同様、音楽の基礎のひとつである拍子とリズムの理解について説明を行った。音符やリズムなどの音楽の基礎知識を習得することで、ピアノ実技や弾き歌いのスキルアップに大きく役立つため、音楽の基礎を改めて確認しておくことは重要であると考ええる。

2) 模擬授業(1) リズムダンス「まねっこリズム」

2) - 1 拍子とリズムについての理解

「まねっこリズム」は、リーダーの創作したリズムを模倣するリズムダンスの楽曲である。8月5日の模擬授業と同様であるが、身体表現に入る前に、五線譜に書かれた拍子をどのようにカウントするかを理解するために拍子の説明をした。

拍子の基本を理解した上で演習に入る。音符や休符をリングの単位や数字に置き換えることで、五線譜に書かれたそれぞれの拍子を理解することができることを指導した。

2) - 2 リズムの創作

遊びの演習前に曲を聴いてみることで、リズム遊びの全体像を把握し、イメージを膨らませることができる。

本実践では、4分音符と8分音符、4分休符を使って、4分の4拍子1小節間のリズムを創作する。手順は8月5日のセミナーと同様であるが、大切なことは、リズムを言葉に置き換えて相手(幼児)に伝え、その言葉で相手(幼児)が真似をすることである。言葉で伝えることによって、幼児は「音」と「言葉」でリズムを体感することができる。リズムを歌の歌詞にして創作することは、生徒(学生)にとっても幼児にとっても、リズムの組み合わせが理解しやすい。

2) - 3 リズムダンスの通し練習

歌い出しの5小節間のリズムダンスの振り付けを全員で練習した。創作リズムの箇所からは、Aグループの創作リズムを全員が模倣し、Bグループの創作リズムを全員が模倣し、Cグループの創作リズム

を全員が模倣する。最後の「じょうずにできました！」の箇所は、全員が右手で大きなハナマルを描く。これを1コーラスとして、リズムの創作メンバーを交替しながら発表した。

3) 模擬授業(2) ポンポンを使ったダンス「夢の中のダンス」(作詞・作曲: 阪田修、振り付け: 岡崎裕美)
本実践で使用するポンポン(1人2個)は、事前に筆者が製作し、アップテンポの「夢の中のダンス」の曲に合わせて、参加者全員でリズムダンスを体得した。

3) - 1 「夢の中のダンス」の曲の歌詞、リズム、構成を把握する

オープンキャンパスの開場時からBGMで曲を繰り返し流し、曲のテンポ感やリズムに親しむ。振り付けは、2歳児の発表会を前提として筆者が考案したものである。振り付けに当たっては、2歳児がこの曲に合わせて自由に踊る様子を参考にした。保育現場では、基本的な振り付けは保育者が踊って見せるが、実際に幼児が踊る場合は、正確さよりも楽しさを優先して、自由に表現を楽しむことが望ましい。

本実践では、曲の歌詞を理解し、明るく元気に踊る幼児のリズムダンスをイメージしながら取り組んだ。時間の制限のため、曲を1分に編集し、1コーラスのみとした。

3) - 2 成果発表

コロナ感染防止対策上から密を避けるため、参加者を4グループに分け、ステージ上と下に1グループずつ配置して成果発表を行った。自ら発表するだけでなく、自分以外のグループの発表を客観的に観ることが大切である。それによって、立ち方、手の動き、目線、身体の使い方、等、自分への課題を見つけることができる。

4) 結果と考察

音楽の基礎的な知識や読譜力を保育士養成課程でのピアノの技術訓練の前段階として学んでおくことは、とても重要であると考え。オープンキャンパスという短時間の講座では、限られた時間内で体験することになるため、音楽理論(楽典)と身体表現(リズムダンス)の両面からリズムを体験することとした。参加者の中には、リズムに自信が持てない生徒や恥ずかしがって表情が硬い生徒もいたが、ほとんどの参加者は、拍子の取り方やリズムを理解した上で身体表現(リズムダンス)に取り組み、満足した様子が見えた。

このように、自分の不安な要素を解決し納得することで、自分の表現のキャパシティを広げ、次のステージに踏み出すことができる。仲間と協力することで得た達成感や成功体験は、音楽分野に限らず将来への自信に繋がると期待したい。

(岡崎)

5) 模擬授業(3) リトミック「海へ行こう！」

5) - 1 静かで穏やかな音楽と即時反応

ひとくちに音楽といっても、楽しい曲ばかりではなく、悲しい曲や嬉しい曲、静かな曲など様々な種類の音楽が存在する。本実践では、「静かで穏やかな音楽」を鑑賞するとともに、ある合図で即時反応をするという取り組みを行った。「静かで穏やかな音楽」が聞こえたら、「お昼寝するイメージ」で机に寄り掛かりリラックスをし、強い音の合図が聞こえたら、「目覚まし時計の音のイメージ」で急いで立ち上がるという内容を実践した。

5) - 2 ダイナミクス of 身体表現

音楽には様々な強さが存在し、譜面上では段階的な強さを表す記号「p(ピアノ)、mp(メゾピアノ)、mf(メゾフォルテ)、f(フォルテ)など」や、次第に変化する強さを表す記号「crescendo(クレッシェンド)、decrescendo(ディクレッシェンド)など」で記される。

これらを身体で表現することにより、体感的にそれらの意味を習得する事が本実践の目的である。ここでは、「海の波のイメージ」を使用し、「おおきな波」を「f」、「小さな波」を「p」、「だんだん大きくなる波」を「crescendo」、「だんだん小さくなる波」を「decrescendo」とし、4種類の波のイメージで

音の強さを身体表現する取り組みを行った。本来のリトミック指導では、波のイメージを表現するために、カラスカーフなどを使用して表現することが多いが、本実践ではコロナ禍の状況を鑑み、使い捨てのできるティッシュペーパーを使用して波の柔らかさを表現することとした。

5) - 3 リズム

夏に食べるフルーツの1つとして「すいか」を取り上げ、著者（二見）が作成したリズム曲「すいか」（参考②）を使用し、そのリズムを手で叩くという取り組みを行った。

上記のリズム曲を、指導者が1行ずつ歌詞を言いながらそのリズムを手で叩き、「はい！」の合図の後学生が模倣をするという方法を取った。これにより、1行を言葉のリズムフレーズとして捉え、フレーズ毎に分けてリズムを叩くことで記憶に残りやすくした。また、●の4分休符の部分は、休符（音のない所）を意識付けさせるために、両手で「ゲー」の形に握ることとした。

さらに、よりリズムを覚えやすくするために、リズム曲「すいか」のリズムが書いてあるプリントに各自歌詞を記入し、言葉とリズムを一致させる作業を行った。

最後に、指導者がこのリズムを使用した音楽をピアノで即興的に演奏し、学生は今回覚えたリズムで手を叩くという取り組みを行った。

参考②：リズム曲「すいか」作：二見美千代（●は、4分休符）

ス・イ・カ・はい！（ス・イ・カ）

♪ ♪ ♪ ●

パク・パク・パク・はい！（パク・パク・パク）

♪ ♪ ♪ ●

あま〜いスイカ・はい！（あま〜いスイカ）

♪ ♪ ♪ ♪ ♪

おいしーね・はい！（おいしーね）

♪ ♪ ♪ ●

5) - 4 結果と考察

静かで穏やかな音楽と即時反応の取り組みでは、学生は集中して音楽（音）をよく聴き反応できた。

ダイナミクスの取り組みでは、音の強さに応じて持っているティッシュペーパーをなびかせる動作を取り入れたが、初めは多くの学生がティッシュペーパーの動きを意識した手元が中心の動作になったため、身体でダイナミクスを感じている様子はみられなかった。そこで、手先だけではなく足の先から頭の先まで身体全体を使って動かすよう指示を出したところ、多くの学生が、強い音の時は大きな波を全身で表現し、弱い音の時は身体を屈めて手先に集中して動かすことができた。

リズムの取り組みでは、最終的には長いフレーズのリズムを覚えて動くのだが、ほぼ全員がリズムを覚えることができた。これは、長いフレーズのリズムでも、言葉の持つリズムと合わせて手を叩くという動作を行うことによって、リズムを覚えることが容易になったためと考えられる。（二見）

4. ワークショップ クリスマス企画『ミュージックベルを奏でよう』：11月28日(土)

本実践では、楽器演奏の取り組みとして「ミュージックベル」の演奏体験を行った。「ミュージックベル」に初めて触れる学生が多くいる事を想定し、楽器の持ち方や振り方の指導と、クリスマスに因んだ楽曲、「あわてんぼうのサンタクロース」（小林亜聖作曲、著者編曲）、「ジングルベル」（J・S・ピアボント作曲、著者編曲）、「星に願いを」（L・ハーライン作曲、著者編曲）の3曲を選曲し、演奏指導を行った。また、ミュージックベルに加え、保育現場の簡易楽器（カスタネット・タンブリン・すず・ハンドドラム）を使用した。

1) 楽器の持ち方と奏法

「スプリング奏法」と「トレモロ奏法」の二種類の奏法の指導に加え、音楽的表現の内容として音の強弱をつける演奏法を指導した。具体的には、f（フォルテ）とp（ピアノ）はスプリング奏法・トレモロ奏法ともに演奏でき、crescendo（クレッシェンド）とdecrescendo（ディクレッシェンド）はトレモロ奏法で演奏できることから、それぞれの奏法で強弱をつけた奏法を指導した。

2) 方法（3曲共通）

- ① CDを聴き、メロディーの音名を確認する。
- ② 楽譜に各自担当音に印を付ける。この時、分かりやすいように色鉛筆などを使用する。
- ③ 個人練習をする。この時全体のメロディーを読みながら行うことで、全体の流れの中で各自の担当を把握する。
- ④ 指導者が音名を読み上げ、それに合わせて全員でゆっくり演奏する。
- ⑤ CDに合わせて、全員で演奏する。

3) 構成

「あわてんぼうのサンタクロース」は、カスタネット、タンブリン、ハンドドラム、スズを演奏に加えた。奏法は、スプリング奏法とトレモロ奏法を併用した。

「ジングルベル」は、ミュージックベルのみ使用し、スプリング奏法とトレモロ奏法を併用した。

「星に願いを」は、ミュージックベルのみ使用し、全てトレモロ奏法とした。

4) 結果と考察

多くの学生がミュージックベルの演奏初心者ということもあり、持ち方、振り方共に不慣れな様子ではあったが、時間とともに次第にしっかりした音が出せるようになった。

「あわてんぼうのサンタクロース」は、歌詞が5番まであり、物語風になっている。歌詞の中に「リンリンリン」、「ドンドンドン」などの擬音語が多用されており、「タンブリンならして消えた」という歌詞があることから、打楽器を使った合奏形式とした。使用した打楽器は、カスタネット、タンブリン、スズ、ハンドドラムとした。学生がミュージックベルを演奏、打楽器は講師（岡崎）が演奏した。この曲はメロディーを5回繰り返すため、回を追うごとに学生の演奏技術が上がったように思われた。これは、学生が「間違えても次で頑張ろう」という気持ちで取り組めたためではないかと考えられる。

「ジングルベル」では、スプリング奏法に加えてトレモロ奏法も多用した。この曲は軽快な音楽であるが、同音を連打する部分が多いため、学生は楽しみながら演奏できた。当日2曲目の楽曲であったことから学生の演奏に少し余裕がみられたため、ミュージックベルの音量をしっかりと出すよう指導し、最後はどの学生も自信をもって堂々と演奏する様子がみられた。

「星に願いを」では、全てのメロディーをトレモロ奏法での演奏とした。スプリング奏法に比べてトレモロ奏法では、一定の音を出すことが難しく、しっかりした音を出すための技術が求められる。このため、奏でる音量に個人差はあったが、全員で奏でるトレモロ奏法での演奏は圧巻であった。また、最後に二声に分かれて演奏する部分では、ハーモニーを感じながらしっかり演奏することができた。

また、CDは比較的早いテンポであったため、これに合わせて演奏する時は緊張感をもって演奏できた。また、周りと一緒に一つの楽曲を奏でることで、協調することの楽しさを感じる事ができた。

（二見）

5. 入学前教育講座『保育者のための音楽の基礎（1）』：12月19日（土）

新年度入学する学生55名対象

1) 入学前教育講座「保育者のための音楽の基礎（1）」について

保育コースに特化する本学の学びのひとつとして、音楽の基礎知識を学習することを目的とする。

子どもの音楽的表現活動において、適切な支援ができる保育士を目指すために必要な「基礎的な音楽実技（ソルフェージュ）」と「基礎的な音楽理論（楽典）」を学習することで、学生全体における音楽的能力のスキルアップを図り、積極的なピアノ練習を促進することに繋がたいと考える。

2) 講座内容

2) - 1 ト音記号を書いてみよう！

ドレミファソラシドを日本音名で表すとハニホヘトイロハであることを説明し、ト音記号がトの音（第2線）から書き始めることを説明した。五線譜でピアノの鍵盤の位置を関連付ける。

- ① 五線譜の第2線からト音記号を書き始める。
- ② 五線譜の名前と加線の説明をする。
- ③ 鍵盤図で中央のドを確認する。

2) - 2 音符で書いてみよう！

ピアノの鍵盤の真ん中のドを中心に、五線譜に全音符で上行形と下行形を書いてみる。

- ① 五線譜の真ん中のドからドレミファソラシド（上行）を書く。
- ② 五線譜の真ん中のドからドシラソファミレド（下行）を書く。

2) - 3 音符クイズ1

- ① 音符の白抜きクイズ 音符を五線譜の空欄に書いてみよう！

音符クイズ2

- ② 音符の1個抜きクイズ 五線譜の空欄の音の名前を書いてみよう！

2) - 4 声に出して読んでみよう！

ドレミファソラシドのそれぞれの音から出発して、音の上行形と下行形の順次進行がスラスラ言えるようになることで、譜読みが早くなる。

（例）ドレミファソラシド→ドシラソファミレド

2) - 5 音符と休符を書いてみよう！

- ① 音符の長さについて（全音符の長さを基準にして音符の名前が付けられている）
全音符 2分音符 4分音符 8分音符（♪の形のみ）
- ② 付点音符の長さについて（付点は、つけた母体となる音符や休符の半分の長さを表す。つまり、母体となる音符や休符の長さの1.5倍の長さとなる）
付点2分音符 付点4分音符
- ③ 休符の長さについて（全休符の長さを基準にして休符の名前が付けられている）
全休符 2分休符 4分休符 8分休符

2) - 6 音符と休符で計算してみよう！

音符の長さを理解できたかどうか、4分音符 = 1、8分音符 = 0.5と設定して、それぞれの音符を数字で計算し、音符に・休符に置き換えて考えるクイズである。

2) - 7 拍子記号について

今回は、4分の2拍子、4分の3拍子、4分の4拍子の3種類だけの説明をし（次回は、8分の6拍子を追加する）、拍子を表す記号の分母と分子の説明をした。

拍子記号とは？

- ① 4分の2拍子について 1小節の中に4分音符が2つ分入る拍子である。
- ② 4分の3拍子について 1小節の中に4分音符が3つ分入る拍子である。
- ③ 4分の4拍子について 1小節の中に4分音符が4つ分入る拍子である。

2) - 8 拍子をリング○で表してみよう！

4分音符をリンゴ1個〇と設定することで、それぞれの拍子が理解しやすくなる。

- ① 4分の2拍子について 1小節の中にりんごが2つ〇〇分入る拍子である。
- ② 4分の3拍子について 1小節の中にりんごが3つ〇〇〇分入る拍子である。
- ③ 4分の4拍子について 1小節の中にりんごが4つ〇〇〇〇分入る拍子である。

2) - 9 拍子クイズ

1小節に入る音符と休符の長さを計算して、リズム譜に書き入れてみよう！

(4分の2拍子・4分の3拍子・4分の4拍子)

- ① 音符や休符を入れてみよう！
- ② 小節線を入れてみよう！

2) - 10 結果と考察

保育士として身につけておきたい音楽の基礎（Ⅰ）として、譜面の読み方・書き方、音符や休符の名前や長さ、拍子の数え方を解説し、項目毎に各自の理解度をクイズ形式でチェックした。ピアノのレッスンの経験歴や吹奏楽・合唱等の経験の有無によって読譜力に個人差があり、すらすらと理解できる学生と混乱する学生がいることは否めない。しかし、入学後はピアノの授業が一斉にスタートするにあたり、自分の音楽的な知識を確認する機会を得ることは大切であると考え。特にピアノ初心者にとっての読譜力は、ピアノ技術の習得のペースに大きく影響するため、この段階での音楽の基礎的な理解は、安心して楽譜と向き合えることに繋がる。今後も引き続き個人差を踏まえて、学習意欲を引き出す指導を見出していきたい。

3) 「ちょうちょう」(スペイン民謡)を、紙鍵盤で弾いてみよう！

3) - 1 紙鍵盤で「ド」の位置確認と指番号

鍵盤楽器を演奏することが初めてという学生が多数であることを踏まえ、鍵盤の位置確認とピアノを弾くために必要である指番号の確認を行った。

まず、鍵盤上の黒鍵は、3つの束と2つの束に分けられるため、この3つの束を「ゲー」、2つの束を「チョキ」として、紙鍵盤の黒鍵に右手を置き、鍵盤の場所を確認した。さらに、「チョキ」の場所を確認後、右手の親指を出して触れた白鍵が「ド」という認識と、ここから右に「ドレミファソラシド」と並んでいることも確認した。

また、一般的にピアノ譜には指番号が記されているため、指番号を覚えることは必須であることから、実際に両手を見ながら指番号を指導し、プリントに記されている「両手の絵」に指番号を各自記入して確認した。CD「ゆびのたいそう」(作曲者不詳)を聴きながら実際に指を動かすことを体験した上で、さらに指番号を定着させるため、指導者がランダムに言った数字の指で机を「トントントン」と叩く取り組みを行った。この際、ピアノを弾くポイントとして、指の先で鍵盤を叩くイメージで動かすよう指導した。

3) - 2 メロディー音とリズムの確認

楽曲「ちょうちょう」の音名とリズムを明確にし、その2つを一致させる取り組みを行った。まず、メロディー音が全て全音符で書かれている楽譜を見ながら、1小節毎に音名を確認し、次にメロディーのリズムを手で叩いた。さらにメロディーとリズムが一致している楽譜を使用し、メロディーを音名で読みながらリズムを手で叩いた。

3) - 3 メロディーの指番号確認

メロディーの音と指番号を一致させるために、学生が、楽譜の1つ1つの音符の上に使用する指番号を記入した。

3) - 4 紙鍵盤で弾く

はじめに指番号が書かれている楽譜を見て指番号を読みながら、実際に机上で指を動かした。次に同楽譜を見て音名を読みながら、実際に机上で指を動かした。最後に、紙鍵盤に指がずれないように置き、音名を読みながら指を動かす取り組みを行った。

3) - 5 結果と考察

本実践の前段階において、音符の読み方や音符の長さについての指導を行った（担当：岡崎）ため、ほとんどの学生が音名を読むことやリズムを叩くことは問題なくできた。また、使用曲が馴染みのある曲であったことも効果的であったと考えられる。演奏技術の有無や楽曲の難易度に関わらず、「知っている曲を演奏できた」という喜びは次への学習意欲に繋がり、入学前にこのような経験をすることは有意義であったと考えられる。

3) - 6 まとめ

本実践により、大きく三つの成果を得ることができた。

一つは、コロナ禍におけるリトミックの実践である。本来、リトミックは身体全体を使って音楽を表現するため、伸び伸びと動ける広いスペースが必要である。しかし、コロナ禍のため十分なソーシャルディスタンスを保つ必要があり、教室内ではスペースの確保が難しかった。またリトミックでは、音を声で表現するために歌うことが必須なのだが、発声についても同様の規制の環境下であった。このため、様々な工夫をしながら取り組みを行った。

具体的には、学生が席から離れずにできること、立つ、椅子に座る、しゃがむ、回る、手を使うことを動きの中心とし、歌わずに音を読む、リズムをたたく、または心唱をすることによって音やリズムを感じるという方法を取った。このため、本来のリトミック指導で習得できる事が多少損なわれる部分もあったが、限られたスペースや限られた動きの中でもできるリトミックの指導法を創造する機会となった。

一つは、ミュージックベル演奏を活用した実践である。本実践で使用した楽曲は、一般的に馴染みのある楽曲を選択したため、メロディー音を覚えることは比較的早くできた。しかし、音名で歌う経験が少ない学生もいることから、メロディーの音名の確認を丁寧に指導したため、限られた練習時間の中でも、ほとんどの学生が間違えることなく演奏できた。このように、馴染みのある楽曲のメロディーを音名で読み、音を覚える経験を重ねることにより、読譜力（ソルフェージュ）を習得することができることが確認できた。

また、ミュージックベル演奏では一つのメロディーを複数人で奏でるため、他と協調することの喜びと責任感を育むことができた。

一つは、紙鍵盤でピアノを弾く実践である。本実践では、鍵盤の位置、指番号を覚えることに加え、簡易曲を1曲演奏した。1曲でも多くの楽曲を弾けるようになることは保育士を目指す学生にとって強みになる。このような実践を経て、ピアノ実技演習に臨むことは有意義であると考えられた。（二見）

Ⅶ 今後の課題

今後も、保育の現場における様々な変化とニーズに柔軟に対応できる学生を育てることを念頭に置き、多様な角度から音楽の経験の機会を増やすことにより、学生が音楽に親しみをもち、保育士としての幅広い音楽表現を習得できるよう指導していきたい。（二見）

■引用文献

- 1) 幼稚園教育要項「文部科学省」、平成29年4月施行。
- 2) 山田俊之著「ザ・ボディパーカッション B級グルメパーティ」音楽之友社、2014年。
- 3) 山田俊之著「楽しいボディパーカッション3リズムで発表会」音楽之友社、2011年。

■参考文献

- ・上野陽子編「みんなでミュージックベル！ークリスマスソング」全音楽譜出版社、2018年。
- ・二見美千代「幼児の発達段階に応じたリトミック教育の有用性一年齢別グループ指導の実践を踏まえて」『千葉敬愛短期大学総合子ども学研究所年報2019（令和元）年度』73-86頁、千葉敬愛短期大学、2019年。
- ・岡崎裕美「0歳～5歳児の発表会よくばりアイデア編～」指導書52-54頁、CD-M17、株式会社メイト、2016年。

VIII おわりに

超高齢化社会の進む日本において、高卒人口の減少は止めようがなく、卒業後の進路においても4年制の大学に進学する傾向が強い。保育・幼児教育分野への関心があっても、短大を志願する者は年々減少している。そうした中で質の高い保育士・幼稚園教諭の育成を目指す本学において、社会に出た時に十分耐えうる力を備えた人材として送り出せる教育が求められている。音楽教育に限らず、すべての授業、指導内容、指導方法の検討は、学生に本物の「先生」として自信をもって送り出すためにも必要であり、本学の存続の大きな決め手となる。

本研究は、ピアノの未経験者における入門期の音楽教育の在り方、グループ分けについて、入学前教育の講座で内容や指導方法を実践の中で検討し、提言するものである。今後の総合的な音楽教育の推進の為に、この取り組みが少しでも役に立つことを期待している。



資料1 2020.8.2 リトミックで遊んでみよう（二見・岡崎）



資料2 2020.8.5 四街道北高校保育特別講座

写真左：「保育者のための音楽」リズムダンス・ボディパーカッション（岡崎）

写真右：「リトミック」変化するテンポの身体表現・「ド」と他音の違い・リズムを覚える（二見）



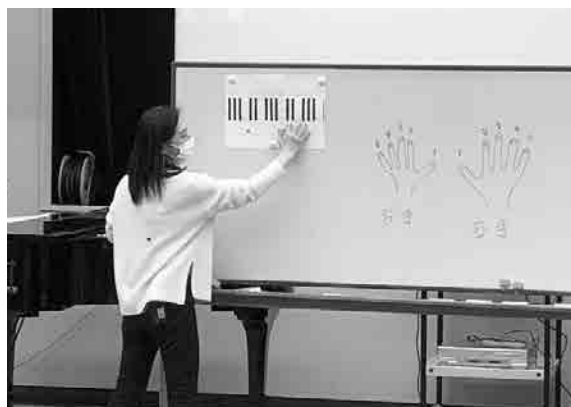
資料3 2020.8.23「リズムで遊ぼう」高校生までに学んでおきたい音楽の基礎

写真左：拍子とリズムの理解、リズムの創作、曲の歌詞・リズム・構成の理解（岡崎）

写真右：身体表現図化で穏やかな音楽と即時反応、ダイナミクス身体表現、リズム（二見）



資料4 2020.11.28 高校生ワークショップ「ミュージックベルを奏でよう」（二見・岡崎）



資料5 2020.12.9 入学前教育「保育者のための音楽の基礎講座」（岡崎・二見）

写真左：階名を書いてみよう（岡崎）

写真右：紙鍵盤で弾いてみよう（二見）

エピソード記述をもとにした園内研修の試み

保育者を対象とした研修の質的調査

齋藤 めぐみ

The Influence on Kindergarten Teachers Training Used by Episodic Recording Method

Megumi SAITO

キーワード：エピソード記述、保育者の資質向上、保育者養成、園内研修

序 論

幼稚園教育要領には、幼稚園教育において幼児一人一人の特性に応じ、発達の課題に即した指導を重視しなければならないと示されている。そのためには、教師が指導の過程を振り返りながら幼児の理解を進め、幼児一人一人のよさや可能性などを把握し、指導の改善に生かすようにすることが求められる（文部科学省、2017）。

子どもを理解する方法の一つに“エピソード記述”があり、保育の世界において、エピソード記述への関心が高まっている（鯨岡ら2009）。エピソード記述を提唱する鯨岡（2013）は、保育者がエピソード記述を行うことについて以下のように説明している。子どもと保育者の“接面”で生じていることを詳細に描き出して保育者が子どもの思いを受け止めているかどうか、それに基づいた対応をしているかどうかを深く吟味し、そこから保育を振り返る契機にするという意義をもつ。加えて保育の中でのエピソード記述の目的を以下の4点で説明している。①保育の担い手である保育者が子どもたち一人一人とのあいだで経験した様々な事項を保育者自身がエピソードに描き出すこと、②その描き出されたエピソードを他の保育者に読んでもらうことを通して自分の保育を振り返る手がかりにすること、③保育者同志の経験を交叉させて保育の中身を吟味し園全体の保育の質を高めようと努めること、④そのことによって子ども一人一人を丁寧に保育するという理念の実現に繋げていくことである（鯨岡、2009）。

これらのことから、エピソード記述は、ただ記録として記述するだけで終わらせるのではなく、子どもたちを理解するために、エピソード記述をもとにして保育者間で保育について振り返ることが望まれ、保育現場でエピソード記述を用いた園内研修をする意味は大きいと考えられる。青木（2016）は、保育者の描いたエピソード記述から、内容を細かく分析して保育者が乳幼児理解の重要性を認識し、乳幼児理解の向上に関するエピソード記述の効用が改めて示唆されたと報告している。また、及川（2017）は、研修参加者がエピソードを書き、全員でエピソードについて話し合う形式で行った研修が、保育の実践に応用できるものとしてとらえられていることがわかったことを報告している。

本研究は、エピソード記述を用いた研修においてエピソード記述の中心である“接面”の描き方を検討し、エピソード記述を用いた研修の今後のあり方を考察することを目的とする。

方 法

1. 研究内容

2020年度の2回の研修を通して保育者が書いたエピソード記述の内容、研修からの学びについての質問紙の自由記述から研修のあり方を質的に検討する。

(1) 研修期間

エピソード記述を基にした研修は2019年度から始めたが、本研究の対象とする研修は2020年度の8月、12月に行われたものとした。

(2) 研修対象者

千葉県にある保育者養成を行う短期大学の附属幼稚園の教諭9名。

(3) 研修内容

各教諭が各自のテーマを決めてテーマに沿ったエピソードを記述し、エピソード自体の振り返りとエピソードに表されている保育の振り返りという2点を中心にグループワークを取り入れて研修を行った。

1) 各教諭のテーマ

A：ごっこ遊び 満3歳児の保育者と友だちとの関わり方

B：子どものごっこ遊びと生活との関連性 3歳児のごっこ遊びと生活・経験とのつながり

C：外国籍の園児の言葉の獲得と子どもたちとのやりとり 3歳児の外国籍の子どもの自己表現とそれに伴う人間関係の変化

D：クラスの子どもたち同志のかかわり 特別な支援が必要な子が他の子どもとの関わり合いの中で相互に成長していく姿

E：4歳児における遊びの広がり イメージを共有しながら遊びが友だちに広がっていくきっかけについて

F：自然との接触の中での子どもたちの育ち 自然とのかかわりを通した子どもたちの人間関係

G：教諭の言葉がけによる子どもの行動の変化 子どもたち同士の遊びの中での保育者の援助（声掛け）

2) 第1回目の研修内容

自分のエピソードを振り返る

①エピソード記述についての確認（図1）

②このエピソードを取り上げた理由を明確にしてタイトルをつける。

③②について表されているエピソードの箇所を抽出し、これらから考察する。

④保育者と子どもの関りが表されている箇所を抽出し、別の関わり方を考察する。

3) 第2回目の研修内容

他者（グループメンバー3～4名分）のエピソードから学ぶ。

①エピソードのタイトルから、筆者のこのエピソード抽出の意図を考える。

②自分ならどのようなタイトルにするか考える（筆者と同じタイトルでも可）

③このエピソードから、子どもの気持ち、保育者の意図について考察する。

④グループ内で学んだことを共有する。

⑤グループ発表：グループ内で学んだことを全体に共有する。

⑥全体的に学んだことをまとめる。

図1 研修で配布したエピソード記述についての説明

1. エピソード記述とは？
1つの場面を詳しく書き、子どもの気持ちを推測したり保育を考察するための記録
2. 書き方
構成：タイトル（ねらい）、背景、エピソード、気づきと学び（考察）
 - タイトル（ねらい）：
 - ・何を伝えたい、学びたいのか？ がわかる
 - ・そのタイトルで考察が書ける
 - ・同じ場面でも学びたいことによりタイトルは異なる
 - 背景：
 - ・子どもの特徴、人間関係
 - ・出来事の状態、経緯等
 - エピソード：
 - ・行動だけでなく、表情、会話、立ち振る舞い、しぐさを書く
 - ・いつ、どこで、だれが、どのように？ という詳細な事実を書く
 - ・その文章で光景を思い描けるか？ 気持ちを想像することができるか？ を読み返して確かめてみる
 - 気づき・学び（考察）：
 - ・タイトルとセット
 - ・タイトルに沿って、気づいたこと、学んだことを考察する

2. 分析および調査方法

1) エピソード記述の中の接面について

青木（2016）を参考として、エピソード記述中、保育者と子どもとの接面が描かれている文節、子どもたちの行動が描かれている文節、保育者の教育的援助が描かれている文節を抽出し、全体に対する接面の割合を求めた。

2) 研修に対する効果について

2回目の研修終了後に今年度2回の研修で学んだこと、感想、研修内容についての要望を自由に記述する自由記述式の質問紙調査を行い質的に分析した。

3. 倫理的配慮

研究にあたり、エピソード記述に描かれた園児について公開することを保護者の了解を取っていないことから、対象となるエピソード記述の内容は公開せず、研修会そのものの効果検証にすることを対象責任者に口頭で説明した。研究の趣旨に同意が得られたため研修で用いた資料を用いて研修効果についての分析のみの研究とした。

結 果

1. 対象者

エピソード記述を行った保育者は、保育歴10年以上の者が7名、1年目の者が2名であった。研修には参与として副園長、主幹2名も参加した。参加者の中で男性は1名であった。

2. エピソード中の接面について

2回の研修で用いたエピソード記述中、保育者と子どもとの接面が描かれている文節、子どもたちの行動が描かれている文節、保育者の教育的援助が描かれている文節に区分し、エピソード記述全体からの割合を算出した。また、接面からの考察が含まれているかどうかを分析し、まとめて表1に示した。

1つのエピソードを抜かして、全てのエピソードに保育者と子どもたちとの接面が描かれていた。保育者Dの2回目のエピソードは、常に客観的な視点での子どもたちの行動が描かれていた。接面は描かれているもののそれについての考察がされていないエピソードも見られた。接面場面は、ほとんどが会話での接面であった。

表1 エピソード中の接面の割合

保育者	研修回	接面 (%)	行動 (%)	教育的 (%)	接面についての考察
A	1回目	67	33	0	○
	2回目	38	62	0	△
B	1回目	11	78	11	×
	2回目	40	60	0	○
C	1回目	25	75	0	×
	2回目	38	50	13	×
D	1回目	23	77	0	×
	2回目	0	100	0	△
E	1回目	7	93	0	○
	2回目	43	57	0	○
F	1回目	45	45	9	○
	2回目	61	39	0	○

3. 研修からの学び

研修からの学びについて、第2回目の研修終了後に各回の研修で学んだこと、総合的に学んだことに分け自由記述形式の質問紙により調査を行った。その結果を表2から表4に示した。

1) 第1回目の研修からの学び

第1回目は、エピソード記述の書き方を確認し、テーマと考察について学んだこともあり、書き方についての学び、テーマを決めたことからの学びについての記述が多くみられた。また、エピソード記述を書くことによる保育への影響についてもみられた。主な内容を共通するカテゴリーに分け、表2に示した。

2) 第2回目の研修からの学び

第2回目は、他者のエピソードを読んで考察し合うというグループワークを取り入れた。そのため、他者にエピソードを伝える、他者とエピソードを共有して考察し合うことからの学びの記述が多くみられた（表3）。

3) 全体的な振り返り

2回の研修を通しての学びについて、また今後の研修のあり方について表4に示した。

表2 第1回目の研修からの学び

エピソードの書き方について
- 基本的なエピソード記録の書き方について、他クラスなどの記録などを参考にしながら学べた。 - エピソード記述の書き方についての詳細を学んだ。背景では、遊びの中に登場する子どもについての特徴やかかわりなどを書くこと、エピソードにおいては、何を伝えたいのかが伝わるように書くこと、またタイトルは焦点を絞り、考察につなげていくことなど実践において学ぶことができた。 - 読んでいる人が分かる背景にすること、それに基づき考察をすること、文章が長くないようにすることを学んだ。 - 同じエピソードでも、さまざまな切り口から書くことがあることを学んだ。 - テーマと考察をし直すことにより、自分が何を伝えたかったのかがより明確になったと感じた - テーマを決めたことが1番の学びであった - もっと細かい部分的な場面をとらえて書くことにも大きな意味があると学ぶことができた。
テーマを設定することについて
- テーマを具体的にしていく事で、今後の保育の視点や気をつけていくべきところを学ぶ事ができた。 - テーマを具体的にすることで、子どもを見る視点が定まり、今まで理解していたようでそうでないこと、気づかなかった声や友だち関係・関係性、その子自身の特性（良い点、課題点など含め）など発見したり、もっと知りたいという意識が強くなったように感じた。 - 同じ場面でも、テーマによっては違うとらえ方ができることは、子どもをより深く知るためには大切なことであると感じた。
保育への影響について
- 保育を行う上で、改めて保育者の援助の仕方や子ども同士のかかわりをねらいを考えながら見ていくことができるようになったと思う - 考察し直すことで、子どもの見方や「子ども＝遊び」に対する捉え方が少しずつでも変わってきたのではないかと思う。 - 保育を文章化することで、思考で振り返るだけでは気づかないことが見えてくると感じた。 - エピソードの記述で“楽しんでいた”“嬉しそうに…”などと表記しがちであるが、果たして本心はどうだったのかを見つめ直すことも大事だと思った。

表3 第2回目の研修からの学び

エピソードの書き方について
・背景やエピソードが分かりにくいと他者のテーマを考えるのが難しく、誰が読んでわかるようにすることを学んだ。 ・エピソードの切り取り方は保育者それぞれだが、それを読んでその場面がイメージできるよう細かく記録を取っていくことで、考察がよりよく実のあるものになると感じた。
他者と共有するグループワークについて
・他者のエピソードを具体的に考察していくことで、新たに子どもの気持ちや保育者が何を意図して援助をしたのかが明確になった。 ・自分にはなかった視点での意見を聞くことによって、新たな気づきにつながり考え方に広がりを持つことができる。 ・自分とは違う見方や考えが面白く、視野が広がった。 ・他者の考えを知れたことで、自分が気づけなかった見方や考え方があることに改めて気づくことができた。 ・自分自身の保育を振り返るには、自分の考えだけでなく他者の意見を聞くということもとても大きな意味のあることにも気づいた。 ・他者の考えを聞くことで、自分の考えとの違いを知ったり、より深く考えたりするきっかけとなったことは大きな学びであった。 ・自分では捉えられなかった視点や考え方も学ぶことができ、考察ではいかに客観的に捉えてまとめることが重要であると学んだ。 ・他者の文章を読むことで、さらに客観的に物事をとらえて、感じたことや考察など意見交換をすることで見えなかった部分を新たに知ることが出来た。 ・相手に自分の考えを伝えていくことで相手側も考え方が広がり、お互いプラスになっているのではないかと感じた。 ・自分の保育について伝える場にもなりとても貴重。自分では持っていない視点だったり、保育の援助の仕方や声掛け子どもの反応など新鮮に感じたり新たな気づきを発見することができた。
保育への影響について
・もっと多くのエピソードを記録して自分なりに考察して考えていけるようにするとより今後の援助などが明確になるのではないかと感じた。 ・どんな援助や、働きかけ・声掛けを行えば遊びが発展していったのかなどアドバイスを頂くことができ、現場で長年働いている方たちの生の声を聴くことができ、手段を知ることが出来た。 ・私自身、発達に合わせた援助をすることが出来ているのだろうかと改めて振り返ることが出来た。 ・自身の保育だったらどう援助をするのか考えるきっかけにもなった。 ・些細な行動や言葉を知ること、保育者が何を目的に保育をしているのか、子どもたちがどう成長して欲しいのか明確になることで、振り返ったり参考にしたりできると感じられた。

表4 全体を通しての学び

エピソード記述の書き方について
・文章だけで伝えるのはなかなか難しかった。 ・1場面を1つの視点から文章で書きあげているため、どこまで細かく伝えたら分かりやすいのか・そして自分ではその場ではこのように考えていたが、文章だけではその意図が伝わりづらいのだと感じた。
書くことからの学びについて
・数分の小さな場面を切り取ったエピソードの中でも、子どもの今の姿を見てとることができ、学びや気づきを多く捉えることができたと感じた。 ・自分が今何に興味を持っているのか、困り感を感じているのかを整理することができた。 ・改めて文章を読み返してみるともっと全体を広い目で柔軟な考えで保育を進めていくべきだと感じた。 ・エピソードを文章に起こしてみると1つの場面だけでも様々な考えや動きがあったのだと気づくことが出来ました ・エピソード記録を書くで見逃してしまいがちな子どもの成長を感じ、認め自信へと繋げることができた。 ・エピソード記録を作成・共有することで、自分の保育やクラスの子どもの様子・行動などを振り返ることが出来た。
話し合うことからの学びについて
・他者のテーマや考察と一緒に考え、意見交換することで自分とは異なる考えの発見や視点の広がり、これで良いんだという安心する部分もあったように思う。
保育への影響について
・子どもや遊びを見る視点が定まったことで見えてきたものが多くあり、意識するところが明確になってきたようにも感じた。 ・他のエピソード記録から各クラスの子どもの様子や先生方の保育の仕方を学ぶことができ、自分の保育にプラスになっている。 ・自分の保育を見直すことが出来た。 ・テーマを具体的に決めることで、より明確な視点となりテーマに沿ったねらいでの保育を心掛けることができた。 ・回を重ねることで、さらに自分たちの保育を見る目が高まっていくことを期待したい。
研修全体について
・第三者から見たアドバイスを多くいただき、エピソード記録はもちろんのこと、より保育力が上がるよう、ご指導ご指摘（添削）いただけるような研修を行っていただけたらよいと思う。 ・赤ペンを入れていただいたところや助言いただいた部分からの学びが大きかった。 ・エピソード記録と同様の動画などの事例を見ながら、記録を書いても勉強になるかと思った。1つのエピソードでそれぞれの感じ方、とらえ方の違いを見ることでまた違った視点で保育を見つめなおすことが出来るきっかけにもなるかと思う。

4 考 察

本研究の目的は、エピソード記述を用いた研修において、エピソード記述の中心である“接面”の描き方を検討し、エピソード記述を用いた研修の今後のあり方を考察することであった。

まず、“接面”に関して考察する。エピソード記述を提唱した鯨岡（2009）は、保育者と子どもとの接面を描くことこそがエピソード記述に重要であると述べている。本研究の対象としたエピソード記述には1つのエピソードを除いて全てのエピソードに接面が描かれていた。ただし、エピソードの記述中、接面が描かれている部分の割合は、行動を客観的に描いている部分より少ないエピソードが多かった。

これらの要因について、まず、著者が行った研修の中で“接面”を強調したエピソード記述の説明をしなかったことが要因のひとつであると考えられる。鯨岡（2013）はエピソード記述で何よりも書き手である自分が接面の当事者として自分の心の動きを含め関わっている人の心の動きを感じ取って描き出すところにその本領があることを強調している。しかしながら、この本領についての説明を強調した研修を行わなかった。また、これまでの保育の記録は客観的に書くことが指導されてきた（鯨岡、2013）。そのため、保育者の多くは、そこからの脱却ができていないのではないかと考えられる。今回のエピソードの分析結果を研修対象者に示し、今後、接面を描くことの大切さを強調して再度説明することが望まれる。

次に、研修からの学びについて考察する。

1回目の研修で学んだことについては、書き方を学んだということ記述が多かった。その中で、テーマを設定すること、テーマを具体的にすることが考察にも結びつき、エピソードで伝えたいことが明確になった、を始め、テーマが大切であると感じた保育者が多かった。また、具体的なテーマの設定は、エピソード記述を描くことだけでなく、保育の視点にも影響を与えていることがわかった。今後、エピソード記述を用いた研修や指導について、テーマを具体的に設定することを強調するとよいことが明らかになった。

2回目の研修では、他者のエピソードを読み、他者からの視点で考察するグループワークを行った。他者のエピソードを読むことについて、また他者からエピソードについての意見をされることからの学びが大きかったことが伺えた。自分では持っていない視点で保育を振り返ることができ、実際どのような援助をしていったらよいのかを考えさせられるきっかけになると思われる。序論でもふれたが、エピソード記述は保育者同士が読み合っこそ保育を振り返ることができるかとされている。今回の研修参加者は、この読み合いにおいての学びが大きいことを実感できたことは大きな学びである。

鯨岡（2009）は、読み合うといっても、ただ感想だけを述べるのではなく「子どもの思いを受け止める」「子どもの気持ちに寄り添う」「子どもの心を育てる」「子どもを主体として受け止め主体として育てる」といったエピソード記述研修の中核的なテーマを常に参照して議論を行う必要があると述べている。今回の研修においては、この視点での議論がほとんどなされなかったことは注意が必要である。

研修の全体的な気づきとしては、書くことでの発見が多かったということが伺えた。具体的なテーマをもち、エピソードで接面を描き考察すること。これが保育者において、自分の保育を振り返る第一歩であると記述から伺われる。

本研究は、研修に対しての効果検証を行い、研修がどうあるべきかについて検討した。しかし、本来研修は保育者の意識の変容、保育の変容を目指すためである。このことをふまえ、今後は研修により保育者の意識がどの程度変わったか？保育がどのように変わったか？等、研修が保育に与える影響について主観的ではなく客観的に評価する方法を見出し、研修の効果を検討することが望まれる。

最後に、再度、なぜエピソード記述を描くのか？についてエピソード記述を提唱した鯨岡（2009）の

文章から抜粋する。

“なぜ、保育にエピソード記述が必要なのでしょう？エピソード記述を保育のみなさんに推奨してきた私にとっては何よりも従来の保育を見直して、目に見えない子どもの心（気持ちや思い）に保育者がしっかり目を向け、それを受け止め、保育者の思いを返すところをエピソードに描き出すことによって、これまでの「させる保育」の流れを変え「子どもの心を育てる保育」の流れを創り出したいというのが、その最大の理由です。…現行の保育や家庭の養育に共通するのは、いずれも大人の「こうさせたい」という思いや都合が先行して、子どもの思いを十分に受け止めていないことです。自分の思いをしっかり受け止めてもらえない子どもは、自分の存在が認められていないように感じ、何かしら不安に駆られ自分がいまこうして自分らしくあることに自信をもてず、元気をなくしたり、意欲的に外界を探索できなくなったりして、次第に大人の言うがままになるか、逆に周りのことに無関心になって自分勝手になるかの両極に振り分けられてしまいます。こうして結局は自己肯定感の乏しい人格をかたち作ることになってしまうのです。…周囲の大人への信頼感と自分への自己肯定感など心の育ちが十分でない子どもを多数見るにつけ、保育の基本、つまり子どもを育てることの基本は「まずは子どもの思いを受け止め、それから大人の願いを伝えていくこと」あと改めて気づかされます。…「思いを受け止め、思いを返す」という目に見えない子どもと保育者の心の動きをエピソードに描き、描かれたエピソードを周囲の者が読んでその場面を共有するしか、それについて知るすべがないのです。これがいま、エピソード記述が保育の場に必要になる第一の理由なのですが、それがまた、保育の振り返りに直結する動きでもあります。”

保育者が日々の保育の中でエピソード記述を描き、皆で共有していくこと。このことこそが、子どもの思いを受け止め、思いを返し、子どもの心を育てる。多くの保育者が実践できるよう、保育者を対象としたエピソード記述を用いた研修を行うことは大きな意味があるといえる。引き続き研修を行い、よりよい研修のあり方を検討することが望まれる。

〔謝辞〕 本研究をすすめるにあたり、研修に参加してくださり事後調査に協力してくださった幼稚園の先生方に記して感謝申し上げます。

■引用文献

- ・青木一永（2016）岡保育実践現場における乳幼児理解の向上に関する研究—エピソード記述への取り組みを通して—大阪総合保育大学紀要（10）, 159-180
- ・五十嵐紗織（2017）保育実習におけるエピソード記述を通した子ども理解 信州豊南短期大学紀要（34）, 99-117
- ・及川留美、小野崎佳代、西村実穂、福崎淳子、梶原里美（2017）現場と大学との協働による園内研修の試みⅡ—保育者によるエピソード記述の検討を中心とした研修事例の構造— 東京未来大学研究紀要10（0）, 177-185
- ・岡花祈一郎、杉村伸一郎、財満由美子、松本信吾、林よし恵、上松由美子、落合さゆり、山元隆春（2009）「エピソード記述」を用いた保育カンファレンスに関する研究 学部・附属学校共同研究紀要（38）, 131-136
- ・鯨岡峻、鯨岡和子（2009）「エピソード記述で保育を描く」ミネルヴァ書房
- ・鯨岡峻（2015）「なぜエピソード記述なのか」東京大学出版会
- ・文部科学省（2019）「幼児理解に基づいた評価」

音楽表現・身体表現・造形表現を融合した 「音楽影絵シアター」の3様式

保育者養成校の授業開発の記録

岡崎 裕美

Three Styles of Music Shadow Play Theater with a Fusion of Music
Representation, Physical Expression, and Modeling Expression

The Childcare Provider Training Development Record

Hiromi OKAZAKI

キーワード：影絵・シアター文化財・児童文化・グループ研究

1 はじめに

児童文化の世界には、絵本、童話、昔話、民話、言葉遊び、わらべ唄や遊び歌、言葉遊び、人形劇、おもちゃ、紙芝居、そして、パネルシアター、手袋シアター、エプロンシアターなどのシアタースタイルの児童文化財があり、保育の現場では日常的に行われる活動である。子どもたちはこれらを体験することで喜びや発見があり、子ども自身が楽しいと感じることの全てが未知の世界のイメージを豊かに広げていく。

児童文化の一つである影絵は、紙などの素材で作られた人形やペープサート、人のシルエットや手指の形や動きによって表現された動物などに光を当てて影をスクリーンに映し出すことで演じられる芸術分野である。保育現場での子どもの影遊びから世界中のプロフェッショナルの影絵の劇団までその活用の幅はとても広い。影絵の技法の原点は「光と影」という、とてもシンプルなものであり、そのシンプルであることの特性は見る人の想像力を高め、作品の製作においても多くのバリエーションを生み出すことができる。

筆者は、保育者養成課程の音楽表現と児童文化の授業を担当し、手遊び、歌遊び、表現遊び、ふれあい遊び、ジャンケン遊び、オペレッタ、歌唱、等の音楽表現、ボディーパーカッション、リズムダンスなどの身体表現、パネルシアター等の造形表現、保育者のための音楽の基礎を指導してきた。

本稿では、それらの要素を融合させた影絵作品を「音楽影絵シアター」と名付け、本学の2年次の授業の中で3年間にわたり、スタイルの異なる影絵作品を考案し、学生と共に製作に取り組んできた。

本稿は「音楽影絵シアター」の3年間にわたる授業実践3様式の記録である。

2 目的

保育者養成校の表現分野の学びにおいては、学生の発想力や想像力を刺激し、一人一人の豊かな感性を磨き、広い視野での経験を積むことはとても重要であると考えます。また、オペレッタや音楽影絵シアターは、一人ではできない活動であり、製作や演習に加え、責任感、協調性が求められる。自分の枠を超えた新しい発想や知識を発見できた時の喜びや、緊張感の中での成果発表時の達成感や充実感は、確

実に自信に繋がるとともに、授業での様々な経験が将来の保育の現場で活かすことができる。

このような作品作りの経験は、音楽表現、身体表現・造形表現の3つの観点から学ぶことは多い。目の前にいる子どもたちとの関わりの中で、楽しさを共有しながら指導するための技法、製作や演習の手順の体験をすることを目的とした。

3 作品

3-1 様式1～四季折々の歌で綴る『美しい日本の四季』～（平成30年度作品）

（1）作品構成

この作品は、日本の四季折々の歌を影絵で綴る作品である。1クラス（30名）で1つの作品を完成させる。

各クラスの学生を、①オープニング～②春～③梅雨～④夏～⑤秋～⑥冬～⑦そして春～⑧エンディングという8つのシーンに担当分けをし、まず、それぞれのチーム毎に全員で絵人形などのペープサートや背景を製作しながら、製作と並行して、ピアノ伴奏と歌唱、曲間のナレーションについては個別に指導した。

また、途中で影絵シアターのスクリーン脇から飛び出してきて身体表現のパフォーマンスをする要素を取り入れて立体的な構成を試みた。

作品の楽曲については、本来は学生達に選曲してもらいたいところであったが、製作から成果発表までの授業のコマ数に限りがあるため、筆者があらかじめ選曲し構成しておくことにした。

（2）影絵シアターの製作

影絵を投影するスクリーン、つまり影絵のシアターは、当初、ダンボールで枠組みを作り、そこに障子紙やトレーシングペーパーを貼ることを想定していたが、本学の事務局長に筆者の理想のシアター構想を相談したところ、数ヶ月後にホワイトボードをリフォームした本学オリジナルの影絵シアター（90cm×180cm）が完成した。

また、投影の光源については試行錯誤の結果、プロジェクターの光を当てることで調整することが可能だと判断できた。

（3）楽曲の選曲

楽曲は、スタンダードな童謡・唱歌・子どもの歌でまとめ、子どもたちも一緒に歌えるような歌を選曲した。オープニングからエンディングまでを通して約12分の作品であり、曲は各月1曲とし、オープニング曲～4月「ちゅーりっぷ」～5月「こいのぼり」～6月「あめふりくまのこ」～7月「たなばたさま」～8月「うみ」～9月「村祭り」～10月「小さい秋みつけた」～11月「もみじ」～12月「北風小僧の寒太郎」～（間奏「ジングルベル」・「お正月」）～1月「たきび」～2月「ゆき」～3月「春が来た」～エンディング曲である。

中でも1月～2月の季節の三寒四温を表現する音楽的な工夫として、1月の「ゆき」を全員で1コーラス歌った後、2月の「春が来た」の歌を半数ずつで重ねて歌い、2月に全員で「春が来た」を歌うことで移り行く季節感を表現した。

（4）表現方法

基本的にはペープサートを製作して投影するが、途中で手影絵や身体表現によるパフォーマンスを組み込み、影絵のシンプルさを生かしつつも学生の若さ溢れる立体的な演出にすることで、「光と影」、「静と動」の要素を存分に展開する。絵人形（ペープサート）に色を付けたい場合は、その部分をくり抜き、色セロファンを裏面から貼ることにした。背景に雪や桜の花びらを降らせる表現は、透明シートに雪や桜の花びらを油性マーカー（水性マーカーは光を通さないため）で描き、ロール状にした透明シートを上

から下に降ろしていく技法を使った。

ダンスやバレエを得意とする学生が存在するクラスでは、学生自身がオリジナルの振り付けを考えて身体表現のパフォーマンスを担当した。

また、一つの作品を通してスクリーン裏で常に全員が作業するわけではないので、シアター裏の影絵スタッフと製作物をシーンの担当毎に大きく入れ替える必要がある。

前半の途中（6月と7月の間）では、シアター前で大きな金色の折り紙でお星さまを折ってハサミを入れて完成させるパフォーマンスを挟み、その間にシアター裏のメンバーチェンジをすることにした。前半と後半のスタッフの入れ替え（9月と10月の間）では、スクリーン裏で人が盆踊りを踊るパフォーマンスをした。後半の途中（12月と1月の間）では、スクリーン裏で人が羽子板で羽根つきをするシルエットを演出した。（羽には棒を付けて人が動かした）

（5） 演出（あるクラスの例）

《音楽影絵シアター ～四季折々の歌で綴る『美しい日本の四季』～》

- ・影絵スタッフ（18名） ・コーラス隊（5名） ・パフォーマンス（2名）
- ・照明（2名） ・ナレーター（1名） ・ピアニスト（2名）

オープニング

4月 ちゅうりっぷ

5月 こいのぼり

6月 あめふりくまのこ

（間奏）キラキラ星

7月 七夕さま

8月 うみ

9月 村祭り 盆踊り・太鼓・笛

……………（この間にメンバーチェンジ）……………

10月 小さい秋みつけた

11月 もみじ

12月 北風小僧の寒太郎 寒太郎さんのパフォーマンス（シアター前）

（間奏）ジングルベル～お正月

1月 たきび

2月 ゆき

↓

（ゆき & 春が来た）

↓

3月 春が来た

エンディング

カーテンコール 全員がスクリーンの前に集合

（6） あるクラスの演出脚本（台本）の記録

各クラスの音楽影絵シアターの成果発表を終え、春・春～夏・夏～秋・冬～春のシーン毎に、演出の脚本を作成した。

脚本は横使いの縦書きの3段とし、上段には「曲目・ナレーション」、中段には「シアター」の状態、下段には「歌詞」を書き込むことにした。特にペープサートのイラストは、実際には置き換えることが不

可能な場合が多いため、記憶に刻まれるようにできる限り描き残しておくことが大切である。

こうした脚本（台本）の作成を習慣化することは、保育現場の発表会などの行事を自分自身の記録として残しておくという作業の経験に繋がる。（学生が作成した脚本：資料①）

（7） 学生の感想からの考察

学生の感想には、「最初に自分の手をスクリーンに映してみても面白かった」「12分間の作品を止まらないで通すことが緊張した」「色が上手く出せなかったり、絵人形の大きさによって光源とシアターの距離感が難しかった」「みんなで協力して作り上げる達成感があった」「影絵として映す時の絵人形のサイズをどのくらいの大きさにするかが難しかった」「クラスみんなで協力して頑張った甲斐があり楽しかった」「ペープサートがどのように映るのかを想像しながら製作するのが楽しかった」「知らない歌も覚えることができてよかった」「保育の現場で役立つと思った」「人の手影絵は温かみが出るといった」「クラスでの思い出になった」「シアター裏で自分がやっている時はわからなかったが、成果発表のビデオで自分たちの作品を正面から見てとても感動した」などの記述があった。

初回の授業で、学生達に自分の影や手影絵を自由にスクリーンに映す体験をするよう促した際、子どものようにしゃぎながら手や身体の手影絵を映して楽しんでいる学生達の様子を見て、影絵は子どもの保育教材として活用できるだけでなく、創造性や芸術性の高さやクオリティーは多様であっても、その楽しみ方や表現は無限の可能性があると考えられる。

3-2 様式2 ～世界の名作より『赤ずきん』・日本昔ばなしより『かさじぞう』～（令和元年度作品）

（1） 作品構成

この年度の2年生は各クラスの人数が例年より多かったことから、各クラスで2作品を製作することに挑戦した。1作品は世界の名作から『赤ずきん』、2作品目は日本昔ばなしから『かさじぞう』を取り上げた。製作スタッフは、クラスの半数ずつと想定していたが、クラスによっては過半数が『赤ずきん』を希望し、製作スタッフ数に偏りができてしまった。

しかし、お互いにタイプの違う作品に出会えることにも意味があることをしっかりと伝え、半数ずつのスタッフになるよう調整してもらった。脚本は、学生達の課題としたいところであったが、前年度同様、製作から成果発表までの授業のコマ数に限りがあるため、筆者があらかじめ構成しておくことにした。

（2） 影絵シアター

影絵シアターについては、前年度同様、本学オリジナルの影絵シアター（90cm×180cm）を使用した。光源も前年度と同様にプロジェクターの光を当てることで調整することが可能だと判断できた。

（3） 楽曲の選曲

音楽についても学生達の課題としたいところであったが、前年度同様、製作から成果発表までの授業のコマ数に限りがあるため、筆者があらかじめ選曲しておくことにした。楽曲はクラシックや既成の曲をピアノ伴奏にアレンジして使用することにした。

作品の所要時間は、オープニングからエンディングまでを通して1作品10分を目標とした。

①『赤ずきん』の音楽

セルゲイ・プロコフィエフ作曲の交響的物語『ピーターと狼』（子どものための音楽作品）を取り入れた。オープニング曲は、「ピーターと牧場の朝」を使用し、このフレーズにナレーションをかぶせることにした。このテーマ曲はわくわくする物語の始まりのイメージに合致した。猟師が登場する場面には同曲の「猟師のおじさん」がぴったりはまった。

また、赤ずきんちゃんのテーマ曲はディズニーの短編アニメ映画『三匹の子ぶた』の挿入歌である

「狼なんか怖くない」を使用した。その他の曲は、劇あそび等のCDから抜粋してピアノ譜に起こし、学生に指導した。

②『かさじぞう』の音楽

劇あそび等のCDから抜粋してピアノ譜に起こし、学生に指導した。

（４） 表現方法

どちらの作品も基本的にはペープサートを製作して投影する。赤ずきんちゃんとおかあさんのシーンは、学生たちの姿をそのままスクリーンに映し込んで台詞のやり取りをするなどして、リアル感と温かみを演出するよう指導した。ペープサートや背景に関しては、絵本が多数出版されているので、絵本のカットやインターネットのイラストを参考にしながら取り組んだ。

（５） 演出（あるチームの例）

①『赤ずきん』

- ・影絵スタッフ（14名） ・コーラス隊（全員） ・照明・背景（2名）
- ・登場人物のセリフ・ナレーション（3名） ・ピアニスト（2名）

②『かさじぞう』

- ・影絵スタッフ（14名） ・照明・背景（2名）
- ・登場人物のセリフ・ナレーション（3名） ・ピアニスト（2名）

（６） 脚 本

音楽を挿入する部分と音楽の無い部分を作り、物語の展開に奥行きをつける脚本にした。

台詞やナレーション・ピアノ伴奏・影絵の作業などは個別に指導し、この脚本にそってオープニングからエンディングまで、成果発表に向けて何度も通し練習を重ねた。

（７） 授業中の学生の様子から見る考察

日本昔ばなしと世界の名作というテイストの違いの2作品の対比が、それぞれの作品へのモチベーションを上げていった。作品の担当を決める段階では可愛い「赤ずきん」のお話を希望する学生が圧倒的に多かったが、昔ばなしの音楽から醸し出された「かさじぞう」の世界観は、次第に作品を温かく包み込んでいった。お話のナレーター役は、筆者のアドバイスを真摯に受け止めた後、自分たちで何度も練習し、それぞれの登場人物になりきって演じていく過程での顕著な進化が見られた。

「赤ずきん」では、ペープサートと人の影絵をミックスさせ、登場人物に見えるためにどのような準備（髪型・洋服、動き、等）をするべきか、また、立体である人間の影は角度によって見え方が違うため、自分がどの角度で立ち、どの方向に視線を飛ばすか等の工夫も必要とされるため、最終段階の練習では細かい箇所にも検討を重ねた。

ピアノ伴奏については、2人一組でタイミングよく入れ替わりながら担当することにした。作品が始まってから終わるまで、物語の進行を妨げず進めていくことの緊張感が求められる。この点でも生演奏の学びになったと思う。音楽とペープサートとナレーション、それぞれが楽しくワンチームとなって作り上げる過程は、相手を信頼し、お互いの力を高めながら引き出していった。

このような経験は将来の保育士としてあらゆる角度から物事を考える力を育てることに繋がると考える。

3-3 様式3 ～3つのシアターを空間移動する影絵『はたらくくるま』他7作品～（令和2年度作品）

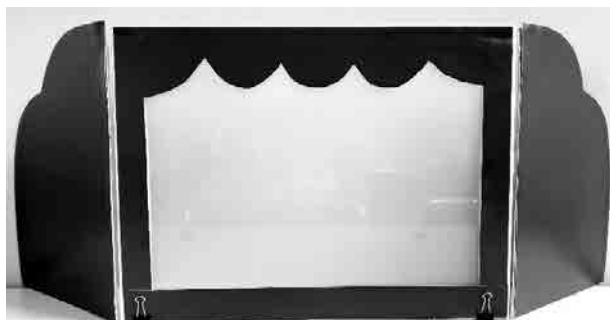
（１） 作品構成

今年度は、新型コロナウイルス感染防止対策上、影絵シアターのスクリーンの裏側での作業が密にならないこと、歌唱を伴わないことを条件とし、新たに「保育現場で活用できる影絵の学習」をテーマとした。

筆者は、それらの条件を満たすために、3つのスクリーンを空間移動する方式を考案した。この方式によりスクリーン裏の演じ手である学生達を3か所に分散させることが可能となる。

前々年度から使用している本学オリジナルの影絵シアター（90cm×180cm）に加え、あとの2つのシアターについては保育現場でも使える影絵シアターとして、筆者が段ボールでミニ影絵シアターを試作した。その「段ボールシアター」の製作が完成し、絵人形で試作をしている段階であることが閃いた。それは、保育現場には存在するであろう「紙芝居シアター」である。紙芝居の本体そのものを挿入しない状態の紙芝居シアターを「影絵シアター」として代用することができるのではないかと。

検証の結果、紙芝居シアターが第2の保育教材となることが判明した。また、段ボールシアターの製作と演習は、学生の手作り作品として、エプロンシアター同様に手軽な保育実習の場の教材としても役立つ学習となる。



発想の源となった段ボールシアター（筆者作成）



紙芝居シアターの紙芝居本体を挿入する部分にトレーシングペーパーを貼ると「ミニ影絵シアター」（第2の保育教材に変身）になる。

（2） 影絵シアターの配置

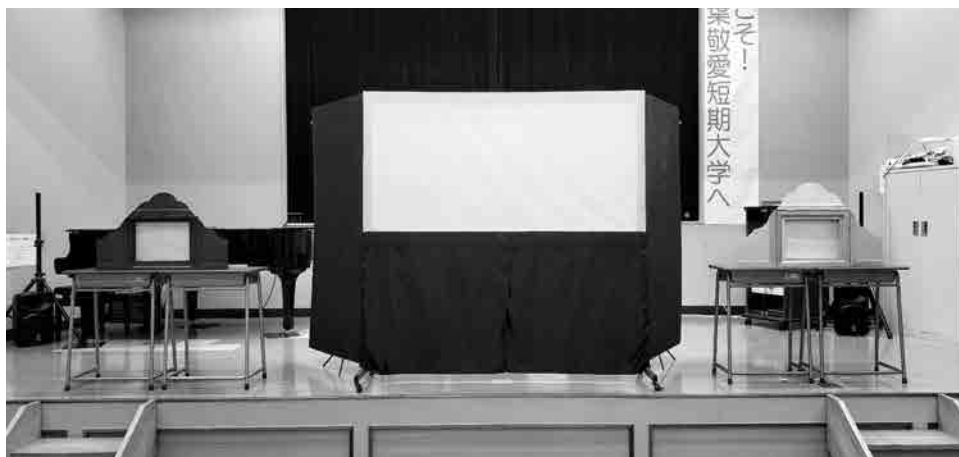
本学オリジナルの影絵シアター（90cm×180cm）をセンターに配置し、紙芝居シアター（ミニ影絵シアターA・B）をその左右に配置する。この設置条件によって影絵作品を空間移動させて演出することを考案した。観客は3つのスクリーンに映し出される影絵に視線を移動させながら楽しむことができる。

センターに配置した大スクリーンでは、人や手指などで演出するダイナミックな影絵を表現することもできる。光源については、大スクリーンは例年通りプロジェクターの光源を使用し、ミニ影絵シアターは、携帯電話の光源で検証してみた結果、可能であることが判明した。（1スクリーンに携帯電話2台使用）

（3） 楽曲の選曲

今年度は、2クラス合同の授業（1クラス32名×2クラス）で実施することで、各クラス3作品とし、1授業中、合計6作品を製作する。そのため1授業（90分）内の1作品の所要時間を短縮することが求められることから、1作品2分以内の作品とした。また、新型コロナウイルス感染防止対策上、歌唱を伴わない作品構成とするため、歌入りのCD音源を1曲2分以内に編集して使用することにした。

楽曲の選曲については、3つのスクリーンの空間移動が効果的に使えると筆者がイメージした8曲、①はたらくくるま1、②動物園へいこう、③てをたたこ、④手のひらを太陽に、⑤うさぎとかめ、⑥おむすびすっとなん、⑦ドレミの歌、⑧南の島のハメハメハ大王）を、あらかじめ挙げ、それ以外の曲で製作したい学生たちには自由曲を選曲するよう促した。選曲の条件は、筆者が挙げた8曲同様、①3つのスクリーンを空間移動させながら効果的に使うことがイメージできる曲であること、②子どもの歌であること、③2分以内の作品にすることとした。



3つの影絵シアターの舞台上の配置

(4) 表現方法

3つのスクリーンを効果的に使いながら空間移動する方式である。基本的には、まず、センターの大スクリーンに曲名（タイトル）を映し出し、曲中では左右のミニ影絵シアターを行き来しながら、最後は3つのスクリーンにラインナップするというダイナミックな表現方法である。

(5) 演出（学生に提案した作品例：筆者作成）



オープニング：前奏部分で映す『ドレミの歌』のタイトル

(例)『ドレミの歌』

センターシアター 前奏：『ドレミの歌』のタイトル

A：ミニシアター 「ドはドーナツのド」（ドーナツのペープサート）

B：ミニシアター 「レはレモンのレ」（レモンのペープサート）

センターシアター 「ミはみんなのミ」（子どもの顔のペープサート）

A：ミニシアター 「ファはファイトのファ」（力こぶのペープサート）

センターシアター 「ソは青い空」（虹のペープサート）

B：ミニシアター 「ラはラッパのラ」（ラッパのペープサートルシ）

センターシアター 「シはしあわせよ さあ歌いましょう」（ハートのペープサート）

「ドレミファソラシド ドシラソファミレ ドミミ ミソソ レファファ ラシシ……」

（五線譜に♪を移動させる）……………（中略）……………

3つのシアター ラストシーンは、全てのペープサートを映し出す

(6) 壁に写して遊ぶ影絵

紙芝居シアターに映すペープサートは、保育園の延長保育の際などに、夕陽等を光源にして保育室の

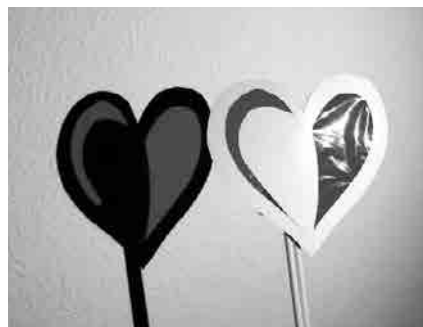
壁に映して遊ぶこともできる。



↑「ソは青い空」

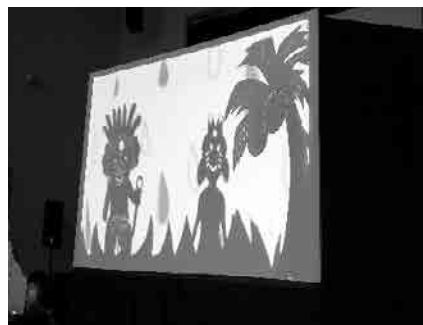
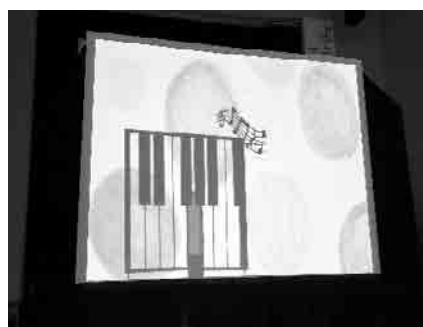
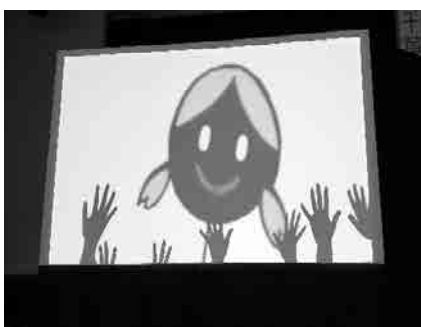


↑「ラはラッパのラ」



↑「シはしあわせよ」

(7) 学生の作品



(8) 学生の反応

学生の感想には「リハーサルでは上手にできたが、本番になると場所を移動する時に他の人とぶつかってしまい、登場人物を出すことが出来ず悔しかったし、申し訳なかった。しかし、練習するたびにどんどん上手になっているのがわかり楽しかった。保育士として働いても、子どもたちと一緒に影絵をしたいと思ったし、誕生日会の出し物でも先生方同士で子どもたちのために行いたいと思った。」「チーム毎に様々な工夫があり、見ていてすごく楽しかった。背景を加えたり、影絵人形の向きを出す位置を変えたりするだけで、見ている人は曲の世界が広がりより楽しめることを学んだ。同じチームで背景や人形について話し合い、一つの作品をより良いものにしていく経験は貴重なものだと感じ、良い思い出となった。今回の授業を通して演じる側と見る側のどちらも体験することができたので、この学びを現場で活かしていきたいと思った。」「光を当てた時の見え方や大きさを考えながらやるのが難しかった。曲のリズムに合わせて動かす時の見え方、ただ横にふわふわ動かすだけでなく実際に歩いているように見えるような動かし方にする事で、見ている側は楽しめることがわかった。パネルの大小によっても見せ方が変わってくるので、少人数で小さなパネルでもやってみたい。」「初めて影絵シアターをやってみて、一つの作品を完成させることは大変であると思った。実際に動かして練習をする中で使う物の動かし方を改善したり、手を使った動かし方、引いたり近づけたりすることで大きく見せたり小さく見せ

たりできることを学んだ。保育の現場でも活かしていきたいと思う。」「影絵シアターの製作を通して、相手にどのように伝わるか、伝えたいことを形にする難しさや楽しさを感じた。最終的に影絵になることを理解して作品を仕上げたり、色をつけることで面白くなるという工夫を考えることで、日々仕上がりや舞台裏での動きがスムーズになり達成感があった。手影絵を取り入れることで人の温かみを出し、リアルさを伝えられたと思う。」「音楽に合わせてタイミング良くペープサートを出すには歌詞の先を考えて準備することがとても大切だと改めて思った。光に対してどの距離で出したらどのように映るかは体験してみてわかった。」「授業を通して影絵の面白さに気づいた。歌・曲に合わせて作品を作り、わかりやすさ、見やすさ、絵人形を出すタイミングなどを工夫した。」「影絵は一人でもできるが、たくさんの人数で作り上げる方が迫力があってより面白くなることを学んだ。」「影絵シアターはただやるのではなく、見る側の人に歌の内容を伝えることが必要であり、その練習の積み重ねが大切であると改めて感じた。」等、が成果発表後の振り返りシートの記述である。

4 授業後の感想と考察

今年度の影絵の製作の入る前に、参考として昨年度の音楽影絵シアター作品を見せたことで、正面からの影絵はイメージできたと思うが、舞台裏での作業は実際に体験することでしか理解できないため、製作を始めたころは表現方法に戸惑い、また、最終的な完成図がなかなか見えず、話し合いや製作が進まない様子が見られた。

しかし、本番に近づくにつれてチームとして、また自分の役割を積極的に活動する姿が見られ、回を重ねる毎にそれぞれのチームが徐々に影絵の楽しさを感じている印象を得た。授業のコマ数に余裕があれば、学生たち自身でテーマを決め、音楽の選曲や編集作業も行うことが望まれる。今年度の音楽影絵シアターは、コロナ感染防止対策の諸条件を満たすことから筆者が発案した様式であり、メインの大きなスクリーンと、サイドに2つの紙芝居シアターを影絵シアターに代用して組み合わせたことで、影絵そのものの面白さが増したと同時に、使いこなすことの演出上の難度も上がった。

特に紙芝居シアターにおける投影の方法、細かい表現方法については今後検討する必要があるが、保育現場で活用できる影絵としての可能性を広げることができたと考えられる。影絵遊びとしては、シアターの枠を越えて保育室にあるものや子どもたちの製作物を壁に投影してみたり、園庭で影踏みをしたり、樹々や葉っぱのような自然物を使った影絵で遊んでみることなど、年間の行事や季節によって様々な取り組みができることに発想を飛ばし、影絵の持つ魅力を幅広く展開してほしい。

5 まとめと今後の課題

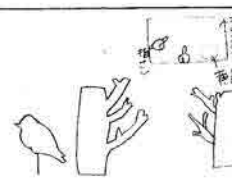
音楽表現・身体表現・造形表現、それぞれを融合させて創作する音楽影絵シアターは、スクリーン上の芸術を超えた空間を演出する芸術作品となることが考えられる。子どもたちが遊ぶ保育教材、学生達のグループ研究として作り上げる創作作品、プロフェッショナルによって表現される芸術的な影絵の世界、レベルやクオリティーは様々であるが、創造することへの情熱や、同じ時間を共有することの楽しさや達成感は、世代を越えて楽しめるジャンルであると考えられる。

3年間の「音楽影絵シアター」3様式は、その年度の学生数や社会現象による諸条件を満たすことで生まれた結果である。このような3様式を考案することができたことは、筆者にとってはとても実に面白い作業であったといえる。

3作品とも授業のコマ数に限りがあるため、構成・脚本の作成と音楽（選曲・編曲）については筆者が提示したが、授業のコマ数に余裕があれば、学生同士でテーマを決め、脚本を練り、音楽を作るという時間を取りたいと思う。

資料①（学生が作成した音楽影絵シアター『美しい日本の四季』脚本）

富田新太郎 (新日本新聞) (大正) 夏	富田新太郎	おやあ、大手な成、海や 見えまし。船にのてどこに行きますか。 お祭りですよ。 フーイイ!!! 元氣いばいとても にやめです。	あなたはどうなお願ひも しますか?	おやあ、大手な成、海や 見えまし。船にのてどこに行きますか。 お祭りですよ。 フーイイ!!! 元氣いばいとても にやめです。
新太郎	おやあ、大手な成、海や 見えまし。船にのてどこに行きますか。 お祭りですよ。 フーイイ!!! 元氣いばいとても にやめです。	おやあ、大手な成、海や 見えまし。船にのてどこに行きますか。 お祭りですよ。 フーイイ!!! 元氣いばいとても にやめです。	おやあ、大手な成、海や 見えまし。船にのてどこに行きますか。 お祭りですよ。 フーイイ!!! 元氣いばいとても にやめです。	おやあ、大手な成、海や 見えまし。船にのてどこに行きますか。 お祭りですよ。 フーイイ!!! 元氣いばいとても にやめです。
夏	おやあ、大手な成、海や 見えまし。船にのてどこに行きますか。 お祭りですよ。 フーイイ!!! 元氣いばいとても にやめです。	おやあ、大手な成、海や 見えまし。船にのてどこに行きますか。 お祭りですよ。 フーイイ!!! 元氣いばいとても にやめです。	おやあ、大手な成、海や 見えまし。船にのてどこに行きますか。 お祭りですよ。 フーイイ!!! 元氣いばいとても にやめです。	おやあ、大手な成、海や 見えまし。船にのてどこに行きますか。 お祭りですよ。 フーイイ!!! 元氣いばいとても にやめです。

音楽絵シヤター「美しい日本の四季」(秋・冬) 2年(一)画 頁(一)	音楽絵シヤター 秋になりまし。あつたのまわりにも小さい秋あります。		音楽絵シヤター 秋になりまし。あつたのまわりにも小さい秋あります。	音楽絵シヤター 秋になりまし。あつたのまわりにも小さい秋あります。	音楽絵シヤター 秋になりまし。あつたのまわりにも小さい秋あります。	音楽絵シヤター 秋になりまし。あつたのまわりにも小さい秋あります。
	音楽絵シヤター 秋になりまし。あつたのまわりにも小さい秋あります。	音楽絵シヤター 秋になりまし。あつたのまわりにも小さい秋あります。	音楽絵シヤター 秋になりまし。あつたのまわりにも小さい秋あります。	音楽絵シヤター 秋になりまし。あつたのまわりにも小さい秋あります。	音楽絵シヤター 秋になりまし。あつたのまわりにも小さい秋あります。	音楽絵シヤター 秋になりまし。あつたのまわりにも小さい秋あります。

音楽絵シヤター「美しい日本の四季」(冬・春) 2年(一)画 頁(一)	音楽絵シヤター 雪がふりました。		音楽絵シヤター 雪がふりました。	音楽絵シヤター 雪がふりました。	音楽絵シヤター 雪がふりました。	音楽絵シヤター 雪がふりました。
	音楽絵シヤター 雪がふりました。	音楽絵シヤター 雪がふりました。	音楽絵シヤター 雪がふりました。	音楽絵シヤター 雪がふりました。	音楽絵シヤター 雪がふりました。	音楽絵シヤター 雪がふりました。

参考文献

- ・谷田貝公昭監修、渡部厚美・岡崎裕美編著 コンパクト版 保育内容シリーズ「音楽表現」 株式会社一藝社
- ・谷田貝公昭監修、新版「保育用語辞典」 株式会社一藝社
- ・小川清美編、演習「児童文化」保育内容としての実践と展開 萌文書林
- ・やさしいピアノの絵本、「ピーターと狼」 千秋次郎編曲 全音楽譜出版社
- ・「劇あそび音楽セット」 キングレコード
- ・劇あそびBGM集「世界の昔ばなしセット」 コロムビアミュージックエンタテインメント株式会社

子どもが生き生きと遊べる環境構成の一考察

幼稚園の事例を通して

小熊 真弓

A Consideration of the Environmental Composition Where Children can Play Lively
Case Study of a Kindergarten

Mayumi OGUMA

キーワード：幼児教育、環境構成

1 問題と目的

幼児教育において重視されるのは、教師がどのように子どもを理解し、その育ちを支えていくかである。教師はその専門性を生かして保育を行うために指導計画を作成する中で、子どもの姿を捉えてねらいを立て、その達成に向けて援助の方法を考えることに日々取り組んでいる。このように保育を行い、振り返り、反省・評価をすることを繰り返し行う中で、保育の質は高まっていく。

文部科学省の調査研究の報告書「幼稚園教員の資質向上について—自ら学ぶ幼稚園教員のために」では、幼稚園を取り巻く環境の変化と幼稚園教員に求められる専門性において、次のように書かれている。幼稚園教員は幼児を理解し活動の場面に応じて適切な指導をする力をもつことが重要であり、さらに家庭との連携を十分に図りつつ教育を展開する力なども求められている。具体的には幼児を内面から理解し、総合的に指導する力、具体的に保育を構想する力、実践力、得意分野の育成、教員集団の一員としての協働性、特別な教育的配慮を要する幼児に対応する力、小学校や保育所との連携推進する力、保護者及び地域社会との関係を構築する力、園長など管理職が発揮するリーダーシップ、人権に対する理解などが、教員に求められる専門性として挙げられている。

そこで、保育の質を高める専門性として、保育を構想する力や実践力が向上すれば、保育が充実し子どもの育ちを支えられるものと捉えた。幼児が遊びを通して総合的に学ぶことができるよう保育環境を構想し設定すれば、子どもが生き生きと活動し意欲をもって園生活を楽しむことができると考える。このことから本研究では、環境の構成を明らかにすることを目的とする。

2 研究の内容

幼児が園生活を楽しむことができるように保育を構想する際、適切な環境があることが重要である。幼稚園教育要領解説（平成30年3月）には、「幼稚園においては、教育的な配慮の下に幼児が友達と関わって活動を展開するのに必要な遊具や用具、素材、十分に活動するための時間や空間はもとより、幼児が生活の中で触れ合うことができる自然や動植物などの様々な環境を用意することである。しかし、これらの環境が単に存在しているだけでは必ずしも幼児の発達を促すものになるとは限らず、幼児が環境と出会うことでそれらにどのような意味があるのかを見出し、どのような興味や関心を抱き、どのよう

に関わろうとしているのかを理解する必要がある」と書かれている。そこで、環境が幼児にとって意味のあるものとなるために構成の仕方について考えてみる。

（１）環境構成の基本

幼児が興味や関心をもって進んで生き生きと遊べる環境を作るためには、環境に対してどのように興味や関心をもつのか、どのように関わろうとするかなどを捉え、幼児の発達に必要な体験が得られ、主体的に環境に関われるように考えることである。

（２）具体的な環境構成のポイント

教師が環境構成する際に考える援助を3つに分類して考えてみる。

①人的環境「ひと」

人的環境とは主に「幼児を取りまく人」のことである。教師や友達の存在、その人たちとの関わりにより、幼児は影響を受けて遊びに取り入れたり、共に遊ぶ中で新たな発見や遊びがおもしろくなるよう考えたりする。

②物的環境「もの」

物的環境とは主に「遊具や用具、素材」などのことである。幼児は身の回りにある物に興味や好奇心をもち、主体的に関わり、自分の遊びや生活に取り入れていくことを通して発達していく。

③場、事象「こと」

場、事象とは主に「場所、時間や空間、出来事、自然現象」などのことである。環境を作る際にどのような場所、広さを用意するのか、時間はどれくらい保障するのかなどを考える。また、身の回りの出来事も大きく影響する。社会事象もその一つであり、今話題になっている事柄（スポーツやエンターテインメント等）や流行している音楽などは幼児の遊びに大きく関わる。中でも自然現象では、幼児は親しみをもち身近に触れて遊ぶようになると、その大きさ、美しさ、不思議さに心を動かされ、これらを利用して遊びを楽しむようになる。

（３）環境構成に必要な教師の感性

教師は環境を考える際には、子どもの実態を把握し、昨日から今日、明日へと遊びが発展していくための援助を考える。そこには幼児の世界を共に感じ、面白い、楽しいと感じることを共有できる教師の感性や感動する心が重要である。そして、幼児が何に感動するのか、その思いを理解し次に何があるか良いかを考えることが環境作りにつながる。

また、遊びの見極めも大切である。幼児の関心が薄れてきたら環境を見直し、思い切って場を縮小する、再構成する、または片付けるなどを考える。幼児の遊び方を見て、聞いて、その遊び方は楽しんでいるのかを見極める力が必要である。

更に、瞬時の判断も大切にしたい。今ここにあると良いとか、タイミングよく援助するなど、その瞬間を見逃さないことが重要である。季節に関することは特に旬が大事である。例えば植物の芽が出る、花が咲くなどの生長する様子、青虫が蝶になる瞬間などこの時期を逃すと同じ現象に出会えないこともある。環境作りは意図的・計画的に進めていくのであるが、教師が幼児の遊びや興味・関心を捉えて瞬時に判断するタイミングが大切である。

（４）事 例

①幼児と共に取り組む環境作り～人魚姫ごっこ

○4歳児11月

○教師の願い

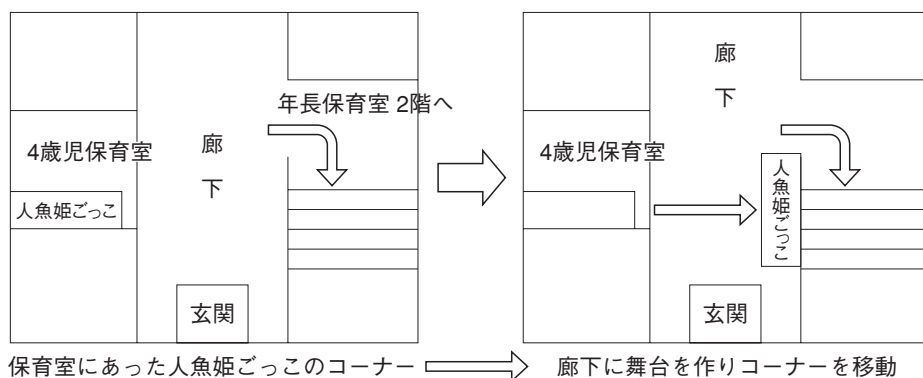
- ・保育室で遊んでいた人魚姫ごっこの場所が狭くなってきた。人魚姫になりきったり、踊りを踊ったりすることを楽しんでいたが、音楽に合わせてスキップなどの身体表現をより広い場所で伸び伸び

と楽しめるようにしたい。そこで、遊びの場所を廊下に移動し子どもたちと舞台を作れば、踊りや表現遊びを伸び伸びと楽しむことができると考えた。

〈工夫した点〉

- ・ 一人で行うのではなく、幼児と一緒に廊下に巧技台を並べて舞台を作った。
- ・ 廊下という空間がより表現しやすい雰囲気となるように、冷蔵庫の段ボールを切り開き背景を作った。教師の準備としては、予め背景になる段ボールにペンキで海の色を塗っておいた。幼児が人魚姫から海をイメージし、魚やカニ、コンブなど海の生きものを絵の具で描き、教師と一緒に背景に貼り付けたことで海らしい雰囲気となった。

○環境作り～保育室から廊下へと遊びのコーナーを移動



保育室から廊下に場所を移動し、子どもと一緒に舞台を作った。廊下が広がったので、舞台の上だけでなく廊下全体を使って遊びを楽しんでいる

〈幼児の姿〉

- ・ 廊下に場所が移ったことでより広くなり、舞台の上だけでなく廊下全体を使って人魚姫ごっこを始めた。「リトルマーメイド」の曲を流し、衣装を着て人魚姫になりきり、更に王子様や白雪姫なども加わって踊ったり、パレードごっこを楽しんだりしていた。
- ・ 2階保育室にいる5歳児が廊下を通る際に4歳児を楽しそうに見たり、拍手をしてくれたりした。これをきっかけとして、4歳児からお客さんになって見てもらいたいという発想がわき、舞台の前に椅子を置いたところ、5歳児が座って見てくれるようになった。

〈読み取り〉

- ・ いつも生活している場である保育室から廊下へと場所を移動することで、幼児が十分に遊べる空間を作ることができた。幼児と一緒に場作りを行ったことで、自分たちの場所という意識をより強く

持つことができた。～環境構成（ひと、もの、こと）

- ・保育室から他のクラスが通る廊下という場所に移動したことで、他クラスの幼児が関心をもち、そこから幼児同士の交流に発展した。保育室にいる中では生じなかったことであり、場所を移動したことから自然に交流が生まれる結果となった。教師が幼児の姿を読み取り、より楽しめるような環境を考えることで、主体的に遊びに取り組み充実感を味わうことができたと思われる。～環境構成（もの、こと）
- ・場所を広くしたことで人魚姫様ごっこが継続し、音楽に合わせて自分たちで好きなように踊っていた踊りを、教師と一緒に一つの形にまとめることができた。それを見ていた男児から海賊ごっこが始まり、歌や踊りを表現しながら海賊と人魚姫ごっこを楽しんだ。その遊びが継続して12月末から1月にかけて子どもたちと劇を創り、発表会へとつなげることができた。これは日常のごっこ遊びが劇へと発展していったものである。教師が環境を変化させたり、人と人がより深く関われるような物的環境や事象を準備したりすることで、保育が継続したり幼児が主体的に活動したりすることができたと思われる。～環境構成（ひと、もの、こと）

②意図的、計画的な環境作り～虫探し

○4歳児6月

○教師の願い

- ・幼児一人一人の行動の理解と予想に基づく計画的な環境構成及び自然との出会いによる環境を適切に構成することによって、幼児が自然と触れ合い、その美しさ、不思議さなどを感じ取り、好奇心や探求心をもつことができるようにするための環境構成を明らかにする。
- ・虫に興味をもち始め虫を探したり捕まえたりすることに喜びをもっているので、自分の好きな場所で自由に虫を探したり捕まえたりすることを楽しんでほしいと考えた。

○環境作り

- ・幼児が虫を探す場所を自分から選び思いのままに虫探しができるよう見守ることを計画した。

〈工夫した点〉

- ・人数分の虫取り網やかごを用意して一人一人が扱えるようにした。遊びの場を園庭だけでなく、園庭から続いている小学校のビオトープまでとした。

〈幼児の姿〉

- ・園庭で虫探しをしている幼児が、トンボが飛んでいることを発見し教師に伝えに来た。「先生、トンボがいるよ!」という言葉に対して別の幼児が「ビオトープに飛んで行ったよ」と言ったので、教師は「トンボを追いかけてみたいね」と話すと「うん、行こう!」「僕も行く」「私も行く」と次々と幼児が集まってきた。日頃よりビオトープは柵のない池であるため、子どもだけでは行かない約束になっている。幼児がトンボに興味をもっている気持ちを満足させたいと考え話したことで、クラスの皆がトンボに興味をもち、見たり捕まえようとしたりした。
- ・幼児はトンボの動きが早くなかなか捕まえられない。しばらくすると池の周りのトンボが交尾を始め、その後産卵する様子が見られた。2匹が連なっている様子やチョンチョンと繰り返し腹部を池の中に入れて産卵する様子を、幼児は好奇心いっぱいに見ていた。初めて見る光景に驚いていたので、「トンボがお父さんとお母さんになって赤ちゃんを産んでいる」と幼児にわかりやすく説明したところ、好奇心をもってその様子を見ていた。



ビオトープでトンボの産卵に出会う「トンボを捕まえたよ」と見せ合う4歳児

〈読み取り〉

- ・虫に関心をもち捕まえようとする幼児の実態に合わせて、教師は意図的、計画的に環境作りを行ったが、予想外のトンボの産卵という場面に出会った。このように自然には偶然の出会いやその時しか出会えない瞬間がある。偶然の出来事に出会うことも予想し、偶然も意図した計画の一部であると捉えて意図的、計画的な環境作りを考えることが大切である。特に自然事象は瞬時に起こることを予想してその出会いを受け止め、幼児の喜びや探求心につなげることが教師の環境作りにおける援助であると考え。～環境構成（ひと、こと）
- ・環境作りでは教師が何を育てたいのかねらいを明らかにすることが大切であるが、自然事象のように瞬時に表れた出会いには、教師自身がタイミングを逃さずに対応することが不可欠である。瞬時に新たなねらいをもつという教師の判断力も必要である。～環境構成（ひと、こと）

③友達との関りが広がる環境作り～砂遊び

○4歳児7月

○教師の願い

- ・園の砂場は一定の大きさはあるものの、水を使ってダイナミックに遊ぶようになると一人一人が十分遊べる広さとは言えない。そこで幼児が思いきり砂遊びができるような環境を作り、一人一人が自分のイメージした遊びを楽しんでほしいと考えた。

○環境作り

- ・砂場は固定された場所にあり広さは限られている。一人一人がダイナミックに遊べる十分な広さを確保するためには、砂場を広げることを考えた。

〈工夫した点〉

- ・規制の砂場の枠の外側に木の切り株を置き、更に砂を増やして現状より広い砂場にした。

〈幼児の姿〉

- ・ 砂場が広がったことで、一人一人が遊ぶ場所がより広がった。水を使って川を作り始めると次々と仲間が集まり、2, 3人で取り組んでいたが7, 8名へと増えていった。仲間が増えるにつれて、個々が水をくんで流すことを楽しむ姿から、「一緒に流すよ、いっせいのせ!」と言って、仲間と気持ちを合わせたり、声を掛け合ったりしながら遊ぶようになった。皆で水を流すという一人ではできない行動を楽しみながら大きな笑い声も聞かれて、仲間が増えて一緒に遊ぶ楽しさを味わう姿が見られた。



砂場の枠の外に切り株を並べて砂を増やして広くした



場所が広がったことで仲間が集まりダイナミックな遊びに発展する



砂場でない場所にも水を運び流して泥を作り遊ぶ「すべすべだよ!」

〈読み取り〉

- ・ 場所を広くすることで個々がイメージした遊びを思いのままにできるようになると考えて取り組んだところ、広がったことから大勢で一緒に遊ぶ、よりダイナミックな遊びに発展するなどの変化が見られた。場所の広さは遊び方のみならず友達との関わりを広げることにつながるということがわかった。～環境構成（こと）
- ・ さらに砂遊びの場は幼児が砂場の枠外の所でも水を流して泥を作るようになり、砂場の砂と園庭の地面の砂の違いを感じて遊ぶようになった。地面の土に水を流して泥を作っている幼児から「こっちはすべすべだよ」と言葉が出て、気づいた他の幼児も同じようにすべすべの泥を作ることを楽しみ、泥の感触の違いを感じることができた。このように砂場という世界からさらに発展して土に触れることで土の性質の違いを発見するという好奇心や探求心が生まれた。教師はいつもの場所とか、この場所が一番適しているという概念にとらわれず、常に幼児の思いを理解しながら、今考えられ

ることは何かを追求していくことが大切である。～環境構成（ひと、こと）

④発想を変えて思いきり体を動かして遊べる環境作り～公園での鬼遊び

○5歳児9月

○教師の願い

- ・3～5歳児クラスは8クラスで人数が多いため、園庭の時間調整を行いながら戸外遊びを行っている。鬼遊びでは逃げたり追いかけたりすることを十分経験してほしいと考え、通常の遊びの場所を見直し、幼児が思いきり活動できるようにしたいと考えた。

○環境作り

- ・園の隣にある公園は松や桜、モミジ、マテバシイなどがあり、季節ごとに幼児が遊びに行っている。この場所は起伏もあり広々として園庭とは違った遊び方ができると考えた。

〈工夫した点〉

- ・公園を利用して遊ぶ経験を日常的に行うことで、自分たちの遊びの場であるという気持ちや感覚を育てる。

〈幼児の姿〉

- ・公園で鬼遊びをすることを喜び、意欲的に逃げたり走ったりしている。広すぎて捕まらないようであるが、幼児の中にはあえて鬼の傍を走ったり、意識的に鬼に近寄ったりして追いかけることを楽しんでいる様子が見られた。
- ・いつまでも捕まらないと持続しないかと思われたが、逃げ手の幼児は大きな木の陰に隠れてこっそり休憩したり、追い手の幼児もゆっくり走ったりして休みを入れている様子が見られた。幼児は適度に休憩したり追いかけたりして自分のペースで鬼ごっこを楽しむ姿が見られた。



芝生が生えていて、松の木が連なり合い起伏のある広い公園は、幼児が思いきり走り回れる魅力的な環境である

〈読み取り〉

- ・日頃より遊んでいる公園であったため、幼児は自分たちの場所という意識があり、公園での鬼遊びを楽しめたと思われる。いつも同じ場所で遊ぶのではなく、身の回りの環境を見直し、発想を豊かにして環境作りを行うことの大切さが分かった。～環境構成（こと）

3 まとめ

環境作構成を考える際、教師は次の点について考えていくと幼児が生き生きと遊ぶ環境を作ることができると思われる。

（１） 幼児の興味・関心の把握

教師も幼児と共に遊びながら、幼児の遊びへの興味・関心を把握したり思いを共有したりすることで援助の方法が明らかになる。また、教師自身の感性を豊かにすることで、幼児の気持ちを理解したり、どのような環境を作ったら子どもの思いを実現したりすることができるかを考えられるようになる。

（２） 保育が継続する環境作り

昨日から今日、明日へと遊びは継続している。しかし幼児の興味や遊びへの取り組みにより満足していたり停滞していたりと常に同じことが繰り返されてはいないことを理解し、遊びを見極めることが大切である。幼児の姿を捉え、時には遊びの場を片付けたり、より楽しくなるよう幼児と共に再構成したりすることが大切である。

（３） 多様な視点と発想

一人一人が遊びに十分関われるような場所、空間、素材などを常に考えて準備する。幼児の発想を実現するには、もっと他に方法があるのではないかと考えたり、教師間で話し合ったりすることでよりよい環境作りが行える。多様な角度から考えることに加えて、幼児の姿を見て今何が必要かと瞬時に考えることも必要である。これらのことを踏まえて環境構成を考えていけば、幼児は主体的に遊びに組み込み、生き生きと園生活を楽しめるとと思われる。

教師は日頃から保育室や園庭を幼児が生活し遊ぶために十分な準備をして保育している。子どもの実態をしっかりと把握し、どのような手だてをすれば育ちにつながるかを考えた時、いつもの場所を様々な視点で見直してみることも新たな発見につながる。これで良いではなくこれが良いと思えるような環境を見出すために、時には発想の転換も必要である。

毎年同じ遊びが展開されているように見えるが、実はその時だけの出会いや関わりがあり、全く同じ保育が行われるということはない。教師は幼児の実態、その時の社会現象、人数など同じ条件ではないことを意識して保育を展開していくことが大切である。そのためには、教師自身が常に新しい感覚、新鮮な気持ち、広い視野で保育を行うことが求められる。また、教師が一人で考えるだけでなく教師間で話し合う、保育を見合う、助言を受けるなどを取り入れることで、より深く環境について考えることができる。

■引用文献

- ・文部科学省 幼稚園教員の資質向上について―自ら学ぶ幼稚園教員のために（幼稚園教員の資質向上に関する調査研究報告）
- ・文部科学省 平成30年 幼稚園教育要領解説

令和2年度運営委員（アイウエオ順）

阿部 孝志	佐久間 敦子
岡崎 裕美	清水 一巳
黒田 順子	鈴木 健一
齋藤 めぐみ	三浦 謙一

『千葉敬愛短期大学総合子ども学研究所 年報』

発 行——2021（令和3）年3月31日

編集者——千葉敬愛短期大学総合子ども学研究所 運営委員会

発行者——千葉敬愛短期大学総合子ども学研究所

所長 鈴木 健一

〒285-8567 千葉県佐倉市山王1丁目9番地

TEL. 043-486-7111（代表） FAX. 043-486-2200

印刷所——大日本法令印刷株式会社

千葉敬愛短期大学